

### 1 戦争と大学

#### はじめに

本章は、ほぼ昭和一二年から、史学科が戦後再発足する昭和二四年までの期間を記述するものである。この期間は、わが大学とわが史学会にとって、あらゆる意味をふくめて受難の時代であった。この章こそ、ふたたび学問と人間のともしびを消さないことを未来にまで記録して伝えたい。

## 戦争への道と大学

手塚隆義

昭和の初期、まだまだ自由であった大学も、しだいに

## Ⅱ 暗い時代の学生と大学 / 昭和一二年から二四年まで

ファシズムの嵐に見舞われるようになった。軍事教育は強化され、大学内での配属将校の発言力は急激に強まり、学生は軍教の時間は、なにをいっても出席せねばならなくなった。もはや配属将校が学生の座談に自分から加わって、「たまには軍教の時間にも出席したまえ」などということはなくなった。ある年の入学式に出席すべく登校した新人生の一人は、配属将校によび止められた。「なぜ敬礼せぬか」「これから入学式に出るのです」「なにをいうか。学内で軍服を着けておれば配属将校にきまつとるぞ。新入生でもそのくらいなことは、わかるはずだ。敬礼!!」そして、学長はなにかの式のあるたびに配属将校の苦情を聞かねばならなかった。「本日の式場における学生の態度はすこぶる悪かった、遺憾である」。

もっとも立教大学が苦心したのは、キリスト教主義と

天皇絶対神聖主義との相剋である。昭和十一年に文部省の私立専門学校以上に、すべて「御真影を奉戴」すべき通達に対して、立教大学もこれを拝受した。これ以後すべての式には正面にかけて敬礼せねばならぬ、とくに宗教上の儀式——公式に大学の行事としては行なわれないうが、キリスト教関係の儀式は当然行なわれた——などは苦心を要するところであった。まだ現在のタツカーホールの講堂はなく大教室やチャペルで式が行なわれていたのであるから、問題のおこる可能性は充分あった。

大学本来の少数主義も、時の流れに抗しきれずしだいに崩れていった。もはや建築当初には比較的多かった寄宿舎の部屋数も、増加した全学生数にくらべて問題にならなくなった。昭和十一年に学長となった遠山郁三氏はこれを廢して改造し、東寮・西寮を、それぞれ文学部・経済部の研究室とした。さらに二学部は、それぞれ教授会をもち、人事や他のすべてを決定することになった。東北・東京両帝国大学の教授を歴任し來った新学長は、研究機関としての大学、教授会による自治の面において、前進せしめたのである。外にも資料室の整備や学位規定の認可などにも力を尽した。思うにこの時期は、立教大学が量的に膨張するとともに、大学としての体制の整備がようやく緒についたときともいえよう。それまで

かされた学生が、木村重治学長の天長節における教育勸語の捧読態度を批難したことによって、学長は辞任した。中国への全面戦争にともない、迎合的な学生の中から国防研究会・健児団などが結成され、さらに学内に軍教用の狭窄射撃場が設置され、さらには「臨時学生課勤務」の特高が学内に配置されるなどファシズムの黒い手は、自由を標榜するわが大学のなかにしだいにしのびよってきた。「神と国とのために」を旗印とする教育の理想も、狂暴化した帝国主義のまえにしだいに色あせざるをえなかった。

一三年四月一日、国家総動員法が公布され、集団勤労作業・国民徴用令が、これにつぎ戦時統制は全面化するにおよんだ。そのころから、しだいに日米関係は悪化の一路をたどり一五年一〇月ライフシュナイダー総長兼理事長は、遠山郁三に総長を、東京教区主教松井米太郎に理事長の職をゆずって帰国した。学生たちは帰国するライフシュナイダー師夫妻を立教通りの両側にならんで感慨をこめてこれを見送った。ひきつづいて外人教師たちの大部分は、昭和十六年の春ごろまでに相つづいて帰国し、風雲にただならぬものを感じずにはられない情勢となった。昭和十六年一〇月一八日、東条英機陸軍大將が総理大臣に任ぜられた。このころ「学生狩り」と称する奇妙な取締りが警視庁の手によって全市内で実施され、学生の憤激をかった。

この年一二月八日、米英に宣戦の布告。英語は敵性語となり応援歌セント・ポールを歌うことも許されなくなった。

は大学とはいっても、私塾的な気分が残っており、教授会などという機関によらずとも、幹部の話し合いですべてが決定される、また、それを家族的として良しとする傾向があったのである。専任の教員も少なく、老年の人が多く、あくまで立教を学問研究の場所とする要求も少なかったものと思われる。実質的にいえば立教のいわゆる大学としての出発はこの時期にあったと思っている。

このような時期に、教員・学生に対する思想の取締りは、急激に強化された。昭和一〇年に文部省は精神作興の訓令を発し、やがて各学校に特別高等警察の刑事を職員として入り込ませ、学生および教員の思想取締りに任じた。こうして大学はもはや自由な研究の場ではなく、国策推進のための一機関に過ぎなくなった。一三年以降国家総動員法、国民徴用令の実施につづいて、大学生は集団勤労作業に駆り立てられた。そしてつぎに大学生のおもむく最後の場所は、もはや戦場ではなかったのである。

(本学教授／文学部長)

#### 戦争と大学

昭和十二年八月七日、芦溝橋事件を契機として、日本の帝国主義は全中国に戦渦を拡大していった。その前年の九月には配属将校のせん動に動

断髪令が出され、配属将校や、その手先の連中は鉄をもつて学内を巡視し、長髪の学生をみつけない切っていた。こうした風潮のなかで、もっとも批判的な態度を堅持し、消極的ではあったが最後まで抵抗していたのは一群の文学部の学生たちにすぎなかった。

学生(当時学徒とよばれた)の修業年限は短縮され、大学から軍隊へと直結し、大学は軍隊の予備校と化してきた。

キリスト教を奉ずるわが大学に対する超国家主義の圧迫は激しく、あたかも配属将校は学長の権限をもつかの事態と化した。あの当時、何人の人間がこの暴挙に抵抗したであろうか。良心的な教師たちは辞表を提出して、いつのまにか大学を去っていった。

島田雄次郎 あのこと、暗い谷間のなかで、ひたすら眞夫人の回想 実を求めようとしていた学生たちは、教師との人間的接触のなかに心のやすらいを求めていた。昭和十二年四月から予科の教師として、後には史学科の講義を持った故島田雄次郎は、史学科または史学科へ進もうとする学生のみき師であった。島田雄次郎夫人から、あの暗い時代の学生たちの思い出と、あの時代に最大の良心をもって生きぬこうとした知識人島田の苦悩を聞いてみよう。

## 立教時代の島田雄次郎

島田芳子

今日、七月二五日は亡夫島田雄次郎の誕生日にあたります。逝いて一年七か月余り、在世ならば五九歳になります。

昭和八年、大学を出ましたころはちょうど不況のどん底でして、神田錦町の正則商業学校へ翌九年四月から勤めました。大学の研究室で原種行氏から「君、正則へ行かないか」といわれたそうで、「ああ行くよ」といとも簡単に話がきまり、案内くださいましたところが芝の正則中学ならぬ神田の正則商業で、正則英語学校のなかに前年の八年に創設されたばかりの商業学校で、正則ちがいで少々おどろいたと申しておりました。立教大学には一二年四月から予科勤務、一四年四月からは文学部教授となりました。当時は、高円寺に住んでおりました、小林秀雄先生の阿佐ヶ谷のお宅とも近く何かと御配慮をいただいております。「平凡で平穩な書齋の生活」に憧れていたと申しましょうか、読書と本屋を歩くこと、コーヒーを飲むこと位で、他に何ら趣味らしいものはございません。

風邪一つひかずに元気ですごしておりました。

学生さん方もおいおいお出でになりました、田辺広さん、関幸夫さん、故塚越二郎さん、平井尚志さん、後藤則夫さん、林英夫さん、権田さん、矢部さんなど、その他大勢の方々にかこまれた高円寺の家の書齋は夜おそくまで灯がともり、賑やかな話声につつまれておりましたのがいまもなつかしく想い出されます。

けれども世の中はますますきびしくなり、とうとう太平洋戦争に突入し、くり上げ卒業や学徒動員となり、関さん、塚越さんの出征となり、壮行会の時の記念写真もございます。塚越さんはビルマ戦線で一九年三月七日戦死されました。先きごろ伊香保のお宅では二郎さんを偲んで追悼会を催され、当時の先生方やお友だちの方々がお集まりになったとうかがいました。故島田をお忘れなく私までお招きをうけましたが、ちょうど遺稿「ヨーロッパ大学史研究」の出来る日と重なり、残念ながらうかがえませんでしたことを申訳けなく存じております。

関さんは正則商業の時の生徒でして、卒業後は外地で就職されましたが、また東京にもどり立教に入られました。塚越さんと一緒に出征されましたが終戦後北支から運よく帰られました。その時私共は立大を辞めて仙台市に程近い増田町に疎開しておりました。二一年のある雪

いませんでした。

しかしこうした平穩な書齋の生活への憧れが強かっただけに、あの当時の世の中の慌しい無気味な動きには人一倍不安を感じておりました。満洲事変は学生時代には、大学卒業の年にはドイツでヒトラーが政権をにぎり、やがてドイツの代表的史学雑誌「ヒストリッシェ・ツァイトシュクリフト」を四十余年にわたって主宰してきたマインツケが一九三五年（昭和十二年）その地位を追われたことは非常なショックであったということ、また、ナチスをさけて南米に亡命し、やがて自殺したオーストリアの作家、ステファン・ツヴァイクの『エラスムスの勝利と悲劇』（一九三四）を本郷の福本書店で偶然にみつけて耽読し、折しも一九三六年はエラスムスの死後四百年に当るので、つづいて続々とエラスムスの文献が出版されたのは、平和主義に徹した偉大な書齋人エラスムスへの讃歌でもあった」とも書いております。

そのころ、この「エラスムスの死後四百年前後」を「史学雑誌」（五〇巻二号）に、エラスムスの「痴愚札讀に就いて」を「史苑」（二二巻・三号）に、「ホースイングのエラスムス論」を「史苑」（二三巻・号）。その他読書に執筆に、そして教壇にと三〇歳前後のまことに壮年なころでございました。けっして頑健ではございませんが、

のふりしきる夜、戸をたたく音に出てみれば関さんです。その夜は一夜、乏しい炭火にあたりながら、あの話この話に夜を明かしました。まもなく東北大学西洋史学科に入られ、そのご長らく仙台におられました。二八年五月、東北大で西洋史学会が開催され、出席の予定でしたが、その一、二年前ごろから胃をいためておりました。突然五月一三日の朝吐血してしまいました。仙台の学会でそれを聞かれた関さんが見舞に來られた時は、入院し手術しなければという時でして、手術にも立会ってくださるという、因縁と申しましょうか、深いつながりがございます。僕は先生の腹の中まで見てしまった」といわれたこともございます。

林英夫さんにはちよつと忘れがたい思い出がございます。当時林さんは紺緋の着物と羽織、それもわりに大きな緋でして袴をつけて、たしか草履をはいていらしたようです。本を小おきにかかえては高円寺の書齋にみえて「先生、小説を読まなきゃだめですよ」と叱られたりしたものでした。

戦争は東西に拡がり、外国書の輸入はとまってしまい、防空演習がはじまって、ご近所の石川達三さんと一緒に近くの小学校で訓練をうけたり、竹槍の練習をさせられたりという異常な日常生活となりました。一八年四

月には召集令状を受け、仙台の野砲隊へ入隊ということになり、郷里福島県中村町（現相馬市）の家に帰ることになりました。「万歳」なんかいいらないよと申しおりましたのに、上野駅では見送りの皆さん方に万歳万歳といわれて苦笑しておりました。翌日は当時の田舎町のことですから轍を立てた大勢の人々に送られて中村駅から仙台に向かいました。一泊後、入隊し身体検査の時には三人の軍医のうちどこで受けてもよいといわれ、中でもインテリらしき軍医のところへ行きましたところ、「君は教授か」といって検査もそこそこに「右肺浸潤、心気亢進の傾きあり」と書かれてしまい、即日帰郷ということになりました。営門を出てからは知らず知らずのうちにかけ足になっていたようで、すぐ「みうら」という牛肉屋にとびこんで、そこから郷里の家に電話をかけてよこしました。私もあらわにはよかったといえなかった当時の周囲の状況に、「ああそう、ああそう」とくり返すばかりでして、いまだにあの時のことを思うと苦笑させられます。

嬉しかったことも事実ですが、この診断が不安にもなり、東京へ帰ってから早速医師の診察を受けましたが別にどこにも異常は認められず、まったく「武士の情」だと喜んだことでした。後で聞きましたがこの時の部隊は

スピーカーから流れだしたベートーヴェンの「田園」に思わず涙のじむ感動をおぼえたと後々までも話しておりましたことなど忘れられない思い出でございます。いまは長野の徳高町のおいでのなる望月市恵先生のお宅へもうかがって時々ごちそうになっていたようです。

郷里の家ははじめ七人暮らしでしたが、姉妹の家族がづつづつに疎開して来まして二〇年三月には一〇人となり五月には二〇人の大家族となりました。当分の食糧事情では容易ならぬことで朝から晩まで「かまどの煙の絶えまがなかった」と申しても過言ではございませんでした。とうとう私は栄養失調から心臓をいため動けなくなっていました。それやこれやと他に事情もあって都落ち（よくこう申しました）の決心をして五月末、立教大学と前年から勤めていました中央大学とを辞めたのでございます。私どもは戦争がなかったならば東京から離れることはなかったと思います。

二〇年六月からは仙台市にある宮城県第一高女に勤め、小さい女学生相手の日々ですが、こども七月の大空襲でせつかく苦心して東京から学校宛に送った書籍を焼いてしまい活字の浮いている灰を口惜しそうにもち帰りましたこともございます。二一年四月からは県立女子専門学校に、二二年四月には水戸高等学校に参りました。

ガダルカナルで全滅ということで危うく難をまぬがれたのでした。

そしてまた教壇に復帰しましたが、戦況はますます陰悪となり、学生の勤労動員の附添いが仕事になり、そのころの他の方々と同様、あちらこちらへ集りました。そのころはもう「身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ」と思うのが正しい一杯であったと書いたものもございます。

一九年七月にはサイパン陥落となり学童疎開が始まりました。国民学校一年生の長男、五歳の長女、七か月の次女の三児の命を守るために私どもも疎開を考えるようになり、とうとう住みなれた東京を離れ、思い出多い高円寺の家をたたむことになりました。郷里へ荷物を送り出し、主人は自分だけの荷物を積んだ荷車をひき、私はその後おしをして荻窪の田辺さんのお宅へお世話になることになったのでございます。私は幼児三人を連れ、老人の三人いる中村町の家へと一家はわかれわかれに暮すことになりました。一九年八月末のことでございます。

東京の空襲はますます激化するばかりで、そのころの田辺家には矢田俊隆先生も下宿しておられ、警報とともに田辺さんのお母さまと防空壕に入ったこともたびたびのようでした。ある晩警報が解除されて部屋の上のゲートル姿のままごろりと横になったとたん、ラジオの

私どもは壮年時代を戦争というたいへんな経験をし、その前後約一〇年くらいは精神的にも落ちつかない日々を過ごしてしまったことは、何としても惜しいことでございます。

先年新幹線開通の数日後に京阪から広島辺まで旅行いたしましたときに、京都に石田仁先生（哲学者、元立大教授、現東大教授）をお尋ねし、久々でいろいろ昔話にふけりました。立教時代のこと、戦争のこと、家庭のことなど、そのとき先生は「われわれの時代はけつしてよい時代とはいえなかった、これからは閑雲野鶴を友としてゆっくり、じっくり生きよう」と。

それから一年二か月ののちには島田は病床で「あれも読みたい、これも書きたい、やりたいことは一杯あるのだ」と毎日のように申しながらついに亡くなりました。昭和四〇年一月二八日の未明でございました。

（故島田雄次郎氏夫人）

戦時下の 前章に指摘されたように、昭和一一年ごろから、わが大学は膨張政策をとり、学生数は増大し、昭和一六年一一月の学生数は予科一、〇四四名。学部九五二名、合計一、九九六名を数えている。この当時行

著者名	17	18	19	20			21	22	23			其	總			
	川端康成	島本健作	阿部次郎	石川啄木	内村鑑三	三木清	尾崎士郎	徳富健次郎	泉鏡花	高山樗牛	寺田寅彦	国木田独步	森鷗外	林芙美子	他	計
予科小計	5	3	4	6	4	5	2	4	4	4	1	5	3	2	104	529
学部小計	8	8	7	4	5	4	7	5	4	3	6	1	3	4	94	410
合実数	13	11	11	10	9	9	9	9	8	7	7	6	6	6	198	940
計比率	1.4	1.2	1.2	1.1	1.0	1.0	1.0	1.0	0.9	0.7	0.7	0.6	0.6	0.6	21.0	100

III もっとも愛好する著者（外国）

著者名別		1	2	3	4	5	6	7	8	9	ニ				
		トルストイ	ヘルマン・ヘッセ	ドストエフスキー	ジ・イ・ド	モーパッサン	ケール	ツルゲーネフ	パール・バック	バルザック	モロー	アナー・トール・ス	ロマン・ローラン	ブールジョエ	ニール・チエ
予科小計		73	57	32	30	36	21	14	12	10	6	6	4	6	7
学部小計		49	27	31	32	21	21	7	9	7	11	6	6	4	3
合	実数	122	84	63	62	57	42	21	21	17	17	12	10	10	10
計	比率	16.0%	11.0	8.0	8.0	7.0	6.0	3.0	3.0	2.0	2.0	2.0	1.0	1.0	1.0
著者名別		10	11	12			13					共		総	
		シェイクスピア	チェホフ	ゴーゴリ	トーマス・マン	スタンダール	クラウゼヴィッツ	リルケ	シュニッツラー	ハーディ	プラトーン	ローレンス	其一	他	計
予科小計		6	6	3	5	1	2	0	4	2	4	1	84		432
学部小計		3	3	3	1	4	3	4	0	2	0	3	71		331
合	実数	9	9	6	6	5	5	4	4	4	4	4	155		763
計	比率	1.0	1.0	0.8	0.8	0.7	0.7	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	21.5		100

〔投票総数1658, 有効票数763, 無効票数895〕

## I 出身地

出身地別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10					
	東京	朝鮮	神奈川	兵庫	福岡	大阪	北海道	愛知	静岡	広島	埼玉				
実数	556	74	64	58	44	43	34	32	32	31	30				
比率	39.0%	5.2	4.5	4.1	3.1	3.0	2.5	2.2	2.2	2.2	2.1				
出身地別	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	其	總
	千葉	山口	新潟	茨城	京都	山形	満州	福島	群馬	他					
実数	27	25	22	22	19	18	18	17	17	242	1425				
比率	1.9	1.8	1.5	1.5	1.3	1.3	1.3	1.2	1.2	17.0	100%				

(投票総数1658, 有効票数1425, 無効票数233)

## II 地区別出身地

出身地別	1	2	3	4	5	6	7	総
	都市	農村	漁村	山農	山農	山村	山漁	数
実数	1198	189	40	23	22	20	5	1497
比率	80%	12.6	2.6	1.5	1.4	1.3	0.4	100%

(投票総数1658, 有効票数1497, 無効票数233)

## III もっとも愛好する著者名（日本）

著者名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
	夏目漱石	山本有三	武者小路實篤	石川達三	島崎藤村	吉川英治	會田雄三	志賀直二	芥川龍之介	石坂洋次郎	横光利一	阿部知二	西田幾多郎	河合栄治郎	岸田國士	
予科小計	125	29	27	23	24	16	15	15	14	9	19	14	16	10	10	7
学部小計	67	34	18	18	13	15	12	11	11	15	4	8	2	7	5	7
合実数	195	63	45	39	37	31	27	26	25	24	23	22	18	17	15	14
計比率	20.8	6.7	4.8	4.3	3.8	3.3	2.8	2.7	2.6	2.5	2.4	2.3	1.9	1.8	1.6	1.5

(投票総数1658, 有効票数904, 無効票数718)

なわれた「学生実態調査」(本学経済学会編「立教大学学生生活調査報告」)によって、当時の立教大学全体の学生の状況をうかがってみよう。

まず第I表から、学生の四割が東京出身者で占められ、他に比して圧倒的な比重を示している。上位を占めている県は、いずれも大都市をもつ県である。第II表によれば、全体の八二%の学生が都市出身であることを示し、第I表

の示す意味を明示している。昔もいまも立教の学生は都会人的センスを特長としていたことが知られる。

愛読書(Ⅲ表)をみると夏目漱石・トルストイを始め文学書が上位を独占している。最近読んで感銘をうけたなか(Ⅳ表)上位三冊は「時局的読物」で、当時ベストセラーになったものである。ところが、これらの愛読書の傾向と、崇拜人物(Ⅴ表)をくらべると、まったく相反する傾

## V 外 国 (B)

人 名 別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	ヒ ッ ト ラ ー	ナ ポ レ オ ン	ム ッ ソ リ ー ニ	エ デ ソ ン	ゲ ー テ	キ リ ス ト	ベ ー ト ー ヴ エ ン	ト ル ス ト イ	ビ ス マ ル ク	ソ ク ラ テ ス
予科小計	202	23	19	9	11	9	10	5	6	7
学部小計	204	19	17	16	10	11	9	9	7	2
合 実 数	406	42	36	25	21	20	19	14	13	9
計 氏 率	28.0%	2.9	2.5	1.7	1.4	1.4	1.3	1.0	0.9	0.6
人 名 別	11	12	13			14	其	無	総	
	カ ン ト	ニ イ ー チ エ	ペ ス タ ロ ッ チ	ミ ケ ラ ン ジ エ ロ	孔 子	ヒ ン デ ン ブ ル グ	ネ ル ソ ン	ヘ ー ゲ ル	他	シ 計
予科小計	5	4	3	3	4	3	0	2	115	397
学部小計	1	2	2	1	0	1	4	1	22	218
合 実 数	6	6	5	4	4	4	4	3	132	615
計 比 率	0.4	0.4	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	9.4	42.4

〔投票総数 1658, 有効票数 1450, 無効票数 208〕

## IV 最近読みて感銘を受けたる著者名

著者名及び書名別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	其	無	総
	「ノ 草 葉 大 尉 」 高 地 」	「マ イ ン ・ カ ン プ 」 ラ ー	「フ ラ ン ス 敗 れ た り 」 ア ン ド レ ・ モ ー ロ ア	「郷 愁 」 杉 正 俊	「宮 川 英 治 」 蔵	「合 田 百 三 」 蔵	「愛 と 認 識 の 出 発 」 中 河 与 次 郎	「天 の 健 作 」 島 本 健 作	「エ ウ ア ・ キ ュ リ ー 」 エ ウ ア ・ キ ュ リ ー	「キ ュ リ ー 夫 人 伝 」 三 木 清 」	其 他	シ	計
予 科	15	10	5	11	9	10	7	4	5	4	193	603	876
学 部	17	14	16	6	7	4	5	7	5	5	171	525	782
合 実 数	32	24	21	17	16	14	12	11	10	9	364	1128	1658
計 比 率	1.9%	1.4	1.3	1.0	1.0	0.8	0.7	0.7	0.7	0.6	22.0	68.0	100%

〔投票総数 1658, 有効票数 1658, 無効票数 0〕

## V もっとも崇拝する人物 (A) 日本

人 名 別		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
		西郷隆盛	乃木希典	東郷平八郎	楠正成	古田松陰	松岡洋右	豊臣秀吉	内村鑑二	父 母	野口英世	福沢諭吉	近衛文麿
予科小計		131	50	23	55	52	26	27	31	22	9	4	7
学部小計		89	52	61	24	33	26	10	31	7	6	10	6
合	実数	220	102	84	79	85	52	37	34	29	15	14	13
計	比率	13.6%	6.3	5.2	4.9	4.6	3.2	2.3	2.1	1.7	1.0	0.9	0.8
人 名 別		13	14		15		16	17	其 他	無 シ	総 計		
		夏目漱石	二宮尊徳	日 蓮	西田幾多郎	勝 海舟	賀川豊彦	新島 謙				普原道真	
予科小計		2	9	6	3	3	3	3	3	56	348	845	
学部小計		8	0	3	6	4	4	3	0	69	286	738	
合	実数	10	9	9	9	7	7	6	3	125	634	1583	
計	比率	0.6	0.6	0.6	0.6	0.4	0.4	0.4	0.2	7.7	39.1	100%	

〔投票総数 1658, 有効票数 1583, 無効票数 75〕

向がある。西郷・ヒットラーなど、軍人・英雄などが上位を占めている。これも「時局の影響」のようであるが、読書傾向をベースとして考えれば、崇拜人物は、たまたま記入欄があるからやむなく「時局的」に記入したもので、自分に対する忠実な観照のなかで書かれたものでないことがわかる。読書傾向では、きわめて人間的な傾向を看取できるが、崇拜人物は一変するところに、この時代の学生たちのおかれていた悲劇的な精神の異相がまざまざと示されているようである。

**学生たち** この期間に史学科を卒業していった人たちの動向

卒業論文とともに、今日の勤務先を記録しておこう。ただし、残念なことに、昭和一五年以後の卒業生の卒論題目が、正確を期せないため、専攻名のみを記すにとどめたい。なお、この八年間の卒業生数五〇名、内九名は不届の人となっている。だから戦前の総計は一一一名、内故人二〇名となる。この数字からもわかるように、きわめて少数で、しかも東洋史・西洋史・日本史とおのおのの講義を選択するわけであるから、学生数(学部三年間総数)よりも教授陣の方が多いということもあったし、先生と学生一人の授業もめずらしくはなかった。それだけに全体として、良い意味での家庭的(家族的)なふんい気があり、終って先生と夕食をともにすることなどが多かった。

○印は故人

昭和一二年 4名

丸山 正光 毎日新聞

○平塚 正和 戦死

○前島 重男 戦死

松田 秀矩 糸魚川中学教諭

昭和一五年(2名)

金 俊五 大同商事・在韓

長沢 行旨 不詳

昭和一六年三月(7名)

板橋 俊典 下館第一高校教諭

白井 一郎 相馬高校教諭

韓 元根 不詳

佐藤 齊 佐藤印刷社長・在岡山

松本 順慶 北海道江別高校教諭

○佐藤 義望 戦死

○樋山 幸夫 戦死 一九年一月一六日東経二三五度一二分北緯二三度一二分の海上にて

○井上 豊太 戦死 一九年二月六日バシー海峡にて

昭和一六年十二月(7名)

大河原 済 金沢文庫

白 秉 欽 不詳

藤田 舜司 番町書房編集長

千家 潔 画家

高田 肇

○李 永海

○張 今成

昭和一七年(3名)

崔 淑炯 東京天文台

○平方 啓之 戦死

昭和一八年九月(7名)

河村 鎬苗 不詳

黄 明益 不詳

佐藤 健 時事通信社

田辺 広 東大図書館整理課長

山本 明 福島県立原町高校教諭

林 英夫 本学教授

洪 錫宝 梨花大学史学科教授

昭和一九年(6名)

鴨下勇四郎 板橋職業安定所

後藤 則夫 立教高校教諭

高橋巳寿衛 有紀書房社長

日高 真也 サンケイ新聞

鈴木 元彦 文部省国語研究所庶務課長

門田 陽一 アカハタ編集部

朝鮮人 昭和三年から昭和一九年までわが史学科は一一

磯江 寿 千葉県立松尾高校教諭 長崎貿易の研究

吉田 孝 本学図書館課長 西城亀茲国に就て

細越 広人 盛岡市立下の橋中学校 僧兵の發生に就て

金 童基 釜山文理科大学史学科 朝鮮に於ける民間信仰

教授兼釜山博物館長

昭和一三年 8名

朝倉 俊二 明治生命本社

面高俊三郎 立教女学院事務長

関口 正吾

元禄時代の經濟概論 歌舞伎考 古代支那における姓氏 族及び同姓不婚問題に就て

寺沢 義雄 江戸時代經濟における 札差の位置

野村 恭敬 読売新聞 鳴長明と其の時代

原田 重之 愛知県東郷中学校教諭 室町幕府政治研究序

本多 定喜 県立安房高校教諭 Edmund Burke のフランス革命説

○服部 譲治 江戸時代海外交通の研究

昭和一四年(6名)

赤岸 幸輔 テレビラジオセンター

竹内 義雄 プリンス自動車

近世ドイツにおけるナショナリズムの發生 万葉集に現はれた庶民生活

生活

学生 一名の卒業生を送り出し、そのうち一七名は朝鮮人学生である。戦前まで、わが大学の学生全体の中でも朝鮮人学生は比較的多い比重を示していた。ただ、学生の全体数が少なかったため他の私大に比して目立たなかったにすぎない。この朝鮮人学生は文学部に偏在する傾向があったし、年とともに増加する傾向があった。これは、わが大学が、人種的偏見を一切、持たなかったことによっている。キリスト教的世界観が、日本人・朝鮮人という人種的差別を選抜入学試験で、全く考慮を加えることがなかったからである。こうしたことが、朝鮮でも知られ、わが大学を目ざしてくるものが年とともに増してきたのである。これは、一切の人種的差別をのりこえて広く研究と教育の機会を広く開放するという、わが大学の進歩的性格を示しているものと思つてよいだろう。

こうしたことを、よく示すことの一つは、昭和四年卒業の楊能漸は、卒業後、助手・講師・助教授として教壇に立つたことによつて象徴されよう。当時、朝鮮人に対する人種的偏見の多かった時代に、朝鮮人教師を登用するという人事のなかにも、みられよう。楊能漸の広い学識と研究に対する真しな態度、人柄などが、人種的偏見をのりこえて卓抜であつたことにもよつたことは当然なことである。

津田左右吉 創立以来、一〇数年を経過してようやく教育の受難 授陣容は固定化し、創立当初の新鮮な在野的精神は失われつつあつた。加えて日中全面戦争の展開は、

とおり(『史苑』二の二)である。

「まづ柴田編纂委員より編纂の経過が述べられ、同委員によつて特製本の贈呈が行はれた。是に対して小林先生立つて謝辞を述べられた。次いで来賓の原田淑人・加藤繁・ライフシュナイダー(本学総理)・杉浦貞二郎(本学学長)・高垣松雄(本学教授・アメリカ文学)・祝宮静の諸氏交々立つて祝辞を述べられ、午後四時半、小林先生を中心に記念写真の撮影を行つて盛会裡に散会した。尚お、当日は本学教授・卒業生・在学生多数出席して盛会であつた」

昭和十七年、小林秀雄は停年によつて史学科長(昭和十二年以来文学部長でもあつた)を辞任されることとなつた。

ここにおいて、誰を史学科長に推すかについて、遠山郁三学長(臨時文学部長兼任)は柴田・手塚の両教授と相談、藤本了泰(講師・史料編纂所)を推す動きがあつたが、同氏が仏寺の出身のため反対があつて、ここに創立以来講師であつた白鳥清を学習院高等部教授のまま、本学の史学科長を兼任することとなつた。そして人事の改革が行われ、柴田・手塚は科長人事に関係したので、自から文学部から予科へ籍を移し、東洋史は白鳥、西洋史は十河、日本史は藤本が人事改革の責任をもち、新しく一七年一〇月(卒業短縮のため、一〇月から新学期から、新講師を招き刷新を図ること)になつた。すなわち、つぎのとおりである。

西洋史 大類伸  
東洋史 加藤繁 市古宙三

学生たちの不安感を高めてきた。純粹への志向・絶望の哲学が、学生たちの魂を捉えていた。史学界では、超国家主義の立場になつ平泉澄・秋山謙蔵らの主観的非科学的な史論があらわれ、学問の危機がしだいに迫つてきた。一五年三月八日には、多くの論文を「史苑」に発表してきた津田左右吉は、『神代史の研究』・『古事記及び日本書記の研究』などの著書が発禁処分とされて、出版者岩波茂雄とともに起訴されるにいたつた。学問の自由と進歩の方向を守つてきた本学史学科は、津田を激励し、これを守る態度を持してきた。柴田・手塚らは、津田を訪ねてその意を伝えた。

小林科長から 史学科・史学会を創立し、立教史学の在白鳥科長へ 野的進歩主義のバックボーンを作り上げてきた小林秀雄は昭和一年一〇月還暦を迎えるにあたり、本学史学会は一月一八日、日比谷山水楼において、祝賀会を開き、先生の長命を門下・知友とともに祝つた。当日の参会者は三〇名であつた。そして翌年の二月(一一巻三号・四号)の「史苑」を「小林秀雄先生還暦記念号」とし「先生に捧げる」の議が決し、在京の柴田亮・岡田太郎・十河佑貞・駒井和愛・手塚隆義・宮本馨太郎・磯江寿の七人を委員とし、後、京都に在任していた海老沢有道が加わつて計画はすすめられた。こうして『小林教授還暦記念史学論叢』は、氏の友人・門下二八氏の論文を編集して完成した。そして昭和十三年六月五日午後二時より日比谷レインボーグレルで贈呈式が行なわれた。そのようはつぎの

日本史 伊東多三郎・川崎庸之

また、この時千利久・茶道史などの研究者として知られた桑田忠親が学問人事の犠牲となつて退職されるにいたつたことは残念である。

教授陣

加藤、大類は当時すでに令名が高かつたが、他あつただけに、このころ、これらの先生たちからの影響をうけ、学問に志すものたちが多かつた。しかし、戦争とそれににつづく敗戦は、学生たちのそれぞれの運命を大きく変えていった。

昭和十七年現在の教授陣と講義題目をここに記録しておく。

白鳥清	東洋史学・演習(諸蕃志)・演習(真臘風土記)
宮本馨太郎	民族学
島田雄次郎	西洋史ドイツ近世史
市村環次郎	東洋史概説
市古 宙三	清朝史・演習(戊戌政変記)
加藤 繁	支那経済史
大類 伸	史学史
野々村戒三	西洋史概説・欧州歴史地理
林 達夫	米国史
川崎 庸之	日本上代史
藤本 了泰	日本中世の社会・演習(吾妻鏡・玉葉)
辻 善之助	日本史概説



駒井 和愛

漢代の青銅器

以下は他学科・他学部との共通講義

日本宗教史 飯田 堯一（予科教授）

美術史 辻 莊一（予科教授）

日本経済史 山下 英夫（経済学部教授）

西洋哲学史 出 隆（文学部講師）

教育史 佐藤 正義（予科講師）

教育学 宗像 誠也（文学部講師）

社会学 小山 栄三（文学部教授）

文化政策 松本潤一郎（経済学部講師）

独語 藤田孫太郎

仏語 後藤 末雄（文学部講師）

## 2 学徒出陣と文学部休止

はじめに 日本軍隊は絶望的な戦いを続けつつあった。

一八年二月一日ガダルカナルから撤退を開始、三日にはスターリングラードのドイツ軍は、ソビエトの軍隊にせん滅され、九月八日にはイタリアの降伏が伝えられた。一〇月には法文系学生の入営延期が停止され、さらに一一月二四日には徴兵適令一年引下げが施行された。

昭和一八年九月一〇日の史学科卒業生のうち、佐藤健・林英夫の二人は、卒業式以前に、海軍予備学生として入団

## 二か年半の立教

田 辺 広

私が立教大学に籍をおいたのは、昭和一六年の四月から一八年の九月までのわずか二か年半のことである。そしてこの二年半は太平洋戦争の前半と期を一つにしている。戦争を抜きにして何一つ考えられなかったこの時期が、私にとってもっともみどり多いしかもなつかしい思い出に満ちているのはなぜだろうか。

私は予科は慶応大学の経済学部で将来サラリーマンとなるべく通学していたのであるが、それがいやになつた。その時代の国家主義的潮流とはまるで関係のない本の乱読から、真理とは何であるか、人生とは何であるかといったことが心の内を占めてきたからである。慶応をとお出した理由は、私の肌に合わないということもあつたが、当時立教の予科にいた中学時代（立教中学）の友人佐藤健から立教の状況をきき、彼を通じて故島田雄次郎先生の声援に接するようになったからである。私が何より羨ましいと思ったのは、この前時代的な先生との個人的な接触であつた。マンモス大学のマンモス学部にあ

し、すでに姿をあらわしていなかった。入営延期停止の結果、ここに大部分の学生は「学徒出陣」となり、史学科学生は大学から戦場へ姿を消してしまった。

「史苑」一五巻四号は「文科系統学徒出陣の命運を押し、本学史学科在学中の〇名も勇躍入営入団することとなつたので一〇月一五日午後五時より目黒雅叙園に於いて教授学生全出席の下に盛大なる壮行会を行った」と記している。なお、〇名とあるのは、当時、人数を記すと、動員数が第五列（スパイ）に知られるというので「その筋」から人数を記録することを禁じられていたためである。

一二月一日には、丙種合格の者でもすべて入営と定められ、事実上大学は機能を停止する状態となつた。こうして、この年一二月の終りころ、立教大学は、ここに文学部休止を決定し、文学部在学中のものは、すべて慶応大学へ自動的に移籍されることになつた。文学部休止にともない史学科は、存在しないことになり、教授・講師いずれも昭和一九年一月二日前後の日付でその職を解かれた。しかし、史学科は存在しないが、立教大学史学会は消滅したのではない。

この当時、学生時代を送った人たちの思い出をここに記録して、二重とこうした悲劇をくりかえさないことを銘記したい。

つては思いもおよばないことであつた。その点当時の立教の文学部はまさによき時代の典型であつたと思う。

私は島田先生のお宅ともう一つ石田仁先生の下宿にも出入りするようになった。西洋史を選んだのは岡先生の影響が強かつたと思う。しかし結局は不肖の弟子であり、私のようなものが学問研究というけわしい道を一生の仕事としようなどと決心したのは、見るものきくもの皆嘘で固めたような戦争というものであつたかも知れない。一体この生きるか死ぬかの大戦争は、ほんとうはどのようなことなのであるか、歴史を学ぶことで、その解決の鍵が得られるような気がしたからである。西洋史専攻の学生は私と佐藤と二人だけであつた。国史の方には林、東洋史には高橋己寿衛がいたが、七、八人ではなかつたかと思う。学生はそれなのに教授陣の方は大したものであつた。当時の史学科長は小林秀雄先生であつた。

専攻担当の島田、十河先生には一方ならぬお世話になつたが、地道な史学の勉強に身のはいらなかつた私は、妙に専攻外の講義が印象に残っている。やみくもに「十二史割記」を読まされ、単位論文に「黎軒について」という題を出された手塚先生を始めはうらんだが、これによつて私ははじめて「史記」や「漢書」の世界を覗くことができ、のちになって東洋史というものは以外に面

白いものだと思うようになった。この点考古学の駒井先生が「西洋史の人はきかなくてもよいから、うしろへ行つて下さい」といわれたのをよいことに何もきかなかったのをいまにして残念に思っている。川崎先生の「六国史」についての講義は選別の単位にはいつていないのに勝手に出席し強引に単位に加えてもらった。いまでもよくあんなことができたものだと思うっている。伊東先生からは室町時代の、桑田先生からは戦国時代のそれぞれ文化史についてきいた。史学以外では、出陣先生の西洋哲学史、宗像誠也先生の教育史などが忘れがたい。講義の内容についてはみな忘れ去ったが、何ものかが、忘れがたいのである。途中新たに加わった若い先生方には宮本先生や市古宙三先生がいた。宮本先生とはどうも仲間意識が消えず、先生もいかにテレクさそうに講義をされた。そのころ大須賀現総長もはじめて教壇に立たれたと記憶している、教えは受けなかったが、校庭を歩いておられるのをだれかが「あれ今度きた哲学の講師で立教出の優等生だ」と教えてくれた。

講義は適当にサボリ、ついに、二人きりの学生であった私と佐藤は、十河先生に「二人一緒に休むときは先に連絡をくれたまえ、休講にするから」と言われた。申訳ないことであった。しかし一日も休まず顔を出したのは

速や関や高橋は学業中端で召集され、私たちの卒業は半年繰り上げられることになった。それまではむしろ武器を与え、それを恐れていた朝鮮人学生にも戦列に加えるため徴兵令が施行されることをいい渡されたあと、芝生などで円くなって何か議論している彼らを見かけるようになった。

ある日、教室に集合を命ぜられ、I大佐から簡単な説明と訓辞を受けたのち、私たちは突然「海軍予備学生を志願するものは手をあげろ」といわれた。勇を鼓して手を挙げなかった私の前の席で林がへんぼんと手を挙げているのを見て驚いた。動員をサボって京都の庭を歩いていたという文学青年の彼にして、と驚いたのである。昭和一八年九月卒業を前にして海軍へ入隊する学生たちを東京駅に送りに行った。だれも彼もどうせ行くところへ行くのだという諦めに似た気持とともに青春のエネルギーの爆発のようなものを感じたのも事実である。

半年端折られたためその年の夏休は卒論書きでつぶれた。とても単位論文まで手は回らない。やはり海軍予備学生となった佐藤のリポートの中には史学同好会の仲間ですつち上げたものもあったが、先生方は黙って受取ってくださった。私にしても期限が切れてからあたふたと川崎先生のお宅にリポートをもって行ったら、「君の分

「史学同好会」の部室であった。あのごみためのような部屋で会誌を発行し、あきもせず議論をし、だれもいないときは本を読んだ。ここで知りあった連中は学部・学年を超え私の青春群像になっている。彼等はいまそれぞれのところで活躍しているが、消えてしまった者もいる。ビルマで戦死した塚越二郎やいまはどうしているかまったくわからない金泰益のことが思い出される。

戦争がはじまった昭和一六年一二月八日、私たちは赤羽の兵器廠に動員され迫撃砲弾の箱詰めをしていた。そのころ赴任してきた軍事教官のI大佐は当分の軍人としても異常であったように思う。私たちを前にして「お前たち立教の学生はアメリカの第五列（スバイ）だ。おれはその根性を直すためにきたのだからそう思え」といった。軍事教練はきびしさを加え、頭は五分刈にされた。習志野ヶ原での野外教練のとき、わずかの余暇に読もうと思つてもつて行つた岩波文庫まで取上げられたときは文化の破壊者に対する憤りといったものをおぼえたのを記憶している。しかし戦後「また逢う日まで」という戦時中の暗い学生生活をえがいた映画をみたが、あれはおそらく戦争末期のもので、私の体験とは何となくかみ合わないような気がする。一体どうなるんだろうとは思つたが絶望感もつていなかった。徴兵猶予期間の切れた塚

はもう及第点をつけておいたよ」といわれ、汗をかいた。九月末の卒業式は淋しいものだった。学生服に混つて陸軍少尉の軍服を着た一人が神妙に卒業免状をもらつていたのが印象的だった。彼は学業中途で応召し、除隊復学したのだった。卒業した者も一月ごろまでにはほとんど陸軍に入隊した。

こういう時勢であつたから就職ということとは在学中まづたく念頭になかった。先生方とくに私の場合、島田先生はいろいろ心配してくださったが、私たちの間で就職とか、それに関連しての未来像が話題に上がった記憶はない。私の拙い卒論はアメリカ史関係のものだったので清水先生にみていただいた。清水先生については島田先生から噂をきいただけでお目にかかったことはなかった。しかし、それがご縁で、卒業後しばらくアメリカ研究所に勤務することになった。すべて二〇数年前のことである。

(昭和18卒/東大図書館)

## 友人たちと先生

林 英夫

ボクが、歴史という学問に情熱をいだくようになった

のは、予科のころ、島田先生と個人的接触をもつようになってからである。それ以前ボクは文学青年（ボクの青春の汚点で、告白したくないことの一つであるが）であった関係から、その後英文科にすすんだ連中と親しかった。学部には史学科を選び、伊東多三郎先生の影響から、近世史を生涯の目標とするようになった。ボクと同級の史学科の連中は、早熟型の秀才が多く、ボクはいつも焦りを感じていた。高橋（有紀書房社長）は、在学中にラングロウ・セニョーボスの「歴史学入門」を十字屋から出版し、すでに大家の風（体が大きく貫るくがあった）を示していた。田辺や佐藤はいつも横文字の本を小わきにかかえ、深刻な思索で、人生を遠観し切った表情をしていた。山本明（新潟県立原町高校教諭）は、手塚先生や宮本先生のゼミのプリントを、ボクのような怠惰な学生のために労を惜しまず作ってくれた。朝鮮出身の河村君は、桑田先生の手足となり、先生の名著「千利久」（創元社）は、たしか彼の浄書になるものであった。いまから考えてみると、あのころそれぞれ自分の研究領域をもち、互いにそれを尊重し合う風潮があった。ボクより後輩になる平井尚志（貝塚主幹）・門田陽一（アカハタ編集部・後藤則夫（立教高校）・鈴木元彦（国語研究所）・関幸夫（共産党中央委員候補）など、いずれも秀才で努力家たちであったから、ボ

突っこめの号令とともに、突撃の姿勢のまま塀をのりこえてエスケープしてしまった。これがバレーで、ボクのほか、B君とともによび出されたが、最後まで行かなかった。このため教練不合格となり、陸軍に入れば大変な目にあうと思ひ学校教練とまったく関係のないという海軍予備学生を志願し、卒業式の一か月前に入団した。立教から海軍に入ったものがひじょうに多いのは、I大佐に象徴される陸軍の印象が、きわめて悪かったためである。佐藤や田辺・山本・河村は、ボクとちがって、文句をいいながらも、一応教練に出席していた。高橋はボクたちより、二、三歳年長の関係で学部二年ごろに入営した。肥満体の彼が徴兵検査で不合格になりたいために、絶食して、やせ切った姿を、いまでもおぼえている。

学部二年のころ、河村にさそわれて桑田先生宅の木曜会（茶会ともいった）に行った。先生の奥さまがお茶とお菓子を召され、そこで先生を中心に談論するわけだが、出席者一五、六名のうちボクたちを除くほかは、国学院の学生で、その学生の一人が「まつろわぬ米英を、まつろわしむるのは、わが大和魂である」と叫ぶようにいった。おおむね、他の学生もこれに同調していた。ボクと河村は、思わず顔を合せ、こういう学生がいることに一驚した。帰るとき桑田先生がボクたちに「何しろ師範部

クだけが異質の怠けものであったように思われる。

もし戦争で人間の運命が変わらなかつたならば、立教史学の第二次全盛期を迎えたのではないだろうか。あのころの学生たちがよく読んだ（？）のは観念論的哲学（パスカル・カント・キエルケゴールなど）や、純粹へのあこがれを示すようなものが多かった。マルクスは予科時代の友人赤木泰二（神奈川県警本部長）が、岩波文庫で、しきりに読むことをすすめてくれたが、なぜなのかそれに熱中することはなかった。ボクのマル・エンの勉強は、復員後の独習である。

軍隊という非人間的世界への反ばつ、戦場への恐怖があこのころのボクたちの心のなかに沈潜していた。だからたえまない不安がボクたちの互いのささやかな友情をささえ合っていた。戦争が激しくなるにつれて、ある数学の教授は、国民服で教室にあらわれ、ヒットラーばりの暴力で学生をなぐりつけ、それが大和魂を植えつける最上の教育であるような言動を示されたりした。遠山学長が、なれない国民服をきて、不器用な姿で挙手の答礼をする哀れな姿は、二十数年後の今日もはつきりと目に浮んでくる。配属将校のI大佐は典型的な悪悪人で、ことに文学部の学生は、文弱部とよんで目の敵のようにされた。ボクはある日、教練場（現立教小学校）で、突撃に

の学生ですからネ」と申しわけないような顔をされたことを覚えていいる。

学部三年のころだったか、「花の木（？）」という雑誌で大熊喜邦氏の「本陣」の研究論文を読み、誤った解釈を発見し、大熊氏に手紙を出したところ、丁寧な返信をいただき、感激したことがある。これが縁で、雄山閣で発行していた雑誌「歴史日本」から原稿を依頼され、原稿料一〇円をもらった。これは歴史に関するもので、もらった最初の原稿料である。この一〇円をポケットに入れて神田で本にかえた。

戦争が終って一年後、ボクは復員した。上京したボクは池袋駅におりた。眼の前に広がった立教の赤レンガの建物と緑の森があざやかに目に映った。荒れ果てた周辺の風景のなかに屹立した立教をのぞみながら、胸の中にしだいに広がるすべてが終った青春のホロ苦い思い出を押さえることができなかった。（昭和18年／本学教授）

## 飯島大佐と資本論

高橋 已詩衛

昭和一六年四月、私は立教大学に入った。立教大学に

は、自由があるとはばかり思いこんでいた。その三月、国学院大学の学部一年を卒えた私は、ただ自由をあこがれたばかりに、一年を無駄にして史学科の一年に入り直したのである。大学を出れば兵隊にいつて死ぬとばかり思いつめていたので、それまでの生を本当に勉強したかった。「勉強しなかった」などと書く、と、気障である。がその二年ばかり前から手をつけていた翻訳をどうしてもしやり遂げたかったのである。

その頃、それまでいた大学は、もう、「皇道研究会」「獅子吼会」等々の学生がはばを利かして、図書館にいる学生を外から痛罵したりというような、とても、静かに勉強できる雰囲気ではなかった。それを訴えた国語学の今泉忠義教授が、「あなたには立教の方がむくでしようね」と、小林秀雄教授を紹介してくれた。

入学試験のときの身体検査は、築地のルカ病院でした。病院内の赤い煉瓦の小道が美しかったし、印象的であった。そういえば、国学院大学の入学試験のときの身体検査は、特務曹長の軍服を着た人が、黒板に「団体講明、道義発揚」と書いて、それを私たちに読ませて視力検査にしていたな、などと思いついて、やはり、立教は自由の府だなどとルカ病院で順番をまっている間にも、よろこんでいたものである。

も着換えたりできなかった。教練は欠席続きだった。その時分、歴研の部室で、関という予科の学生と話し込んだりしていた。二人の話題は伊豆公夫の本についてよく話し合ったように覚えている。話が一区切りついたところ佐藤たちが帰ってきた。「ひどいやつだ。きちがいだな、あいつは」といったのは、多分佐藤だった。「あいつ」というのは、もちろん飯島大佐のことである。

歴研の小さな部屋は、いわば、われわれの抵抗の部屋でもあったといえよう。フリッピンから帰ってきた三木清の話をひそかに聞いたのもこの部屋だった。かなりあとになって、召集を受けた関からの葉書が、教室の壁に貼ってあった。葉書には何も文章は書いてなく、ただ「デイトリツヒの消えし彼方や星一つ」という関の句が書いてあっただけだった。

そのころのある日、大学の斜め前の古本屋で話し込んでいたら、主人が「どうです、買いませんか」と奥からもってきたのが資本論だった。昭和一〇年、私が東京外語の英文の一年だったとき、唯研のメンバーの一人というので、私も西神田警察にあげられたことがあったが、その時、家も搜索されて資本論などをもっていかれてしまつてから、私には、資本論がなかったのだ、しかし、八冊ものだったと思うが、すぐに買い込んだ。そし

たしかに、当時の立教の史学科の教室は、白山の空気がまだまだ充ち満ちていた。隠居仕事の老教授のねむい講義もあったが、手塚隆義先生、島田雄次郎先生など、二時間が短かくてならなかった。

が、軍事教練には驚いた。教室の平和な空気とは、何とまたかけへだてがあり過ぎることか、軍事教官は飯島大佐と記憶しているが、飯島大佐は、そう背は大きくはなかったし、やせぎすの細面にせいかなさをいっばいに漂わせて、絶えず学生は軟弱であると絶叫していた。右肩だったかを心持あげて絶叫する姿は劇的でさえあった。

教練には、二回出席しただろうか。三回目、どうしても出られなかった。生理的に不愉快になった。

その頃には教室内で友人もでき、西洋史の佐藤、慶応から来た田辺などという連中と親しく口をきくようになっていた。この連中の溜り場が、「歴史研究会」——當時は「歴研」というていたが、その部室である。カーキ色の教練服に着換えるのも、歴研の部室だった。

佐藤はカーキ色の教練服に着換えると、妙に怒り顔になっていた。田辺は、まあ、しょうがないよと小さな声で呟いたのをなぜかいまでも思い出す。

私は私で、教練服を持ってきたいながらも、どうして

て、歴研の教室に持ち帰って聞いてみたら、何と見返しに私の署名があるではないか。警察に没収されたはずの資本論が五、六年の間に、古本屋の手を経て、再び私の手に戻ってきたのである。

この資本論を私は自宅に持ち帰らずに、歴研の教室の一隅にしまっておいた。

入学して二年目の九月末、私は召集を受けた。在学わずか一年五か月。手塚先生に提出するアラビア史のリポートが中途だったので、研究室にお詫びにいったことを記憶している。

一〇月一日、近衛輜重兵連隊に入隊。入って気がついたことは、その時入隊した者は全部が大学卒で、幹部候補生要員だったわけだ。全員幹候補を出して毎晩おくまで勉強させられた。

ところが、入隊して一か月目、中隊の事務室から事務室当番があわてふためいて私を探しにきた。「おい、お前に大佐が面会に来ているぞ」というのである。私は、心当りがないうまま、中隊事務室にすっ飛んでいった。

「高橋二等兵、入ります」と大声あげて、事務室に入った途端、目に映ったのは、あの飯島大佐であった。中隊長はその脇に佇立している。

中隊長が私に何かいったようにもおぼえている。しか

し、私の記憶しているのは、次の瞬間の飯島大佐の声だった。

「こら不忠者ッ。お前は教練も出ず、怠けてばかりおつて。お前のような奴は、絶対幹候にさせんぞ。外語のことも分っているッ」

私は、このとき、何かいったようにおぼえている。が何をいったかおぼえていない。再び飯島大佐はどなった。

「これは、お前の本だろ、こんな本を読みおつて、許しておけん」と、出したのは、ああ、あの資本論だった。歴研の部屋に置いておいたはずの資本論だった。

不思議な資本論の経緯である。

入隊六か月後、幹部候補生の発表があった。殆んど全員が甲幹に受かっていた。資格がありながら落ちついたのは、東大経済を出たのと京大を出たのと、私と三人だけだった。

恩讐の彼方へという言葉がある。が、飯島大佐は、恩讐の彼方へどころか、仇を求めて軍隊にまで、私を追ってきたのである。

飯島大佐は、戦後どうなったか知らない。しかし、私はいまとなって飯島大佐には感謝しなければならぬことがある。飯島大佐のおかげで幹候に落ちた私は、幹候

昭和一八年の正月はまだ空襲もなかったせいか、街にはなお戦捷気分もただよっていたが、立教大学では遠山学長の聖ルカ病院を中心とする医学部創設計画の破綻が伝えられ、またアメリカ研究所の山下教授に關する、と角の風評が飛んでいた。そして、その月末には医学部創設計画の破綻と年末に北支の戦場に令息郁雄君を失った失意の遠山学長は、ついに理事会に辞表を提出し、二月三日にはわれわれ教職員に対して学長引退の挨拶が行なわれ、大学の前途の困難を思わせるものがあつた。三辺金蔵先生は、この遠山学長引退のあとを受けて、学長に就任されたのである。

四月の新学期とともに、学園にも再び活気があふれるようになった。たとえば、史学科では、五月五日の大学創立記念日に教授・学生そろって鎌倉の史蹟見学に楽しい一日を過ごし、六月一二日、加藤繁・大類伸・板沢武雄の三博士を迎えて行なった史学講演会は聴衆が二〇〇名をこえ、会場にあふれる程の盛会であつた。今にして思えば、戦時体制下の識者の渴をいやすものであつたのであろう。六月二四日、と角の噂さのあつた山下教授の解職が伝えられたが、同二八日、その山下教授死去の通知に接して驚いた。

七月七日、三辺学長・須之内学監による教職員招待会

発表後すぐ一等兵としてスマトラに行つて、敗戦後一年たつて無事日本に帰つてきた。しかし、私と同期で、幹候に受かったものは、殆んどが少尉中尉級、沖繩で死んだというのである。生きているということだけで感謝すべきものなら、飯島大佐は私の恩人である。

(昭和19年ノ有紀書房社長)  
編集部註 飯島大佐は配属特校として、たゞ一人の戦犯とされ獄中で病死。

宮本肇太郎 宮本は、戦中刻明な日記を書きつづけてきの戦中記録 た。この日記をもとに、氏の立教記録を、氏によつてまとめてもらったのがつぎである。

この記録のなかに点彩する戦場におもむく学生たちの姿、動員されて工場で働く学生たちのいたましい姿と、大学の動向が、戦争激化と共に、荒廃その傷あとを、ますます拡大する様相が理解できるであらう。

## 戦中日記抄

宮本 肇太郎

昭和一八年の記録

が九ノ内の鉄道ホテルで行なわれた。この時はまだ大宴会ができたのである。しかし、この頃から戦況はようやく困難となつたのか、教職員や学生の応召が多くなり、各家庭にも七月中に防空壕を掘ることが厳命せられていた。そして、九月に入るとすぐに、大学では学年試験が行なわれ、試験の終了とともに各学科ごとに新卒業生の送別会が催された。九月二二日午後七時半、私は自宅で東条首相の国内決戦体制に關するラジオ放送を聞いた。決戦体制に伴つて、文科系学生の徴兵猶予の停止、文科系授業の停止、学校の統合などが述べられた。このことはすでに三月中旬に文部省の永井専門学務局長談として報ぜられていたところであるが、いよいよそれが実施されることになつたのである。立教大学第一十回卒業式は、その翌日の二三日午後二時から行なわれた。前夜の東条首相の放送によつて、この日の式場にはなにか悲愴な空気がただよっていた。卒業生よりは残る学生や教職員の間に心の動揺があつたのであろう。

〇月に入ると、新学年度の授業がはじまつた。しかし、学生たちが徴兵検査のために相次いで帰郷したので、満足に授業もできなくなった。各学科の研究室や学友会の部会では、学生たちの入隊や応召に対して、早くも壮行会や送別会を催した。一〇月二一日、神宮外苑で都下

大学の出陣学徒壮行会が舉行され、授業は休講となった。私は暗い思いで、この壮行会のラジオの実況放送を聞いていた。この学徒出陣で、文学部はほとんど学生がいなくなるので、どのような処置がとられるか、私たちは大学当局の指示をまつたが、なかなか当局の方針は示されなかった。一月一二日午後二時から、教育戦時体制に関する教授会が開かれたが、なんら具体的方針は打出されなかった。ついで二四日午前一〇時から文学部教授会が行なわれた。この席上、当局より提示された案は、一月二二日をもって文学部の授業を二たん停止し、残る在学生は他の大学に転学せしめ、教職員は全員休職とし、その俸給は一月かぎり支給せずというものであった。文学部の廃止にひとしいこの提案に、教授会は反対するとともに、近く協議の上対案を具中することとした。当時の学院理事会は、文学部を廃止して、新たに理工科専門学校を設置して、国家の要請に応えんとし、一方、文学部各科の教職員たちは、たとえ学生たちが全員出陣してしまっても、その心の支えとして研究室を守りとおして、帰還の日を待つという、切ない気持であったのである。

その頃、私たちの研究室や家には、毎日毎夜、入隊・応召する学生たちがやって来た。みな明るい顔で、いつ

ものように学問を論じ、人生を語った。それでもやはり国旗を持参して、それに記念の署名を求めるのであった。私は学生たちに小勇をいまして、「大勇」と書いて、ひそかにその無事帰還を祈った。みな元気な声で「行つてまいります」といい残して帰つて行つたが、その後姿を見送って私はいつも暗い気持になるのであった。

二月一日、私は義弟の入隊に附添つて高崎駅に行つた。整列して営門を入る入隊者の中に立教大学の制服制帽の学生をみつめて、私は思わず声高く激励した。私の声に気づいたその学生は手を挙げて応えて行き過ぎた。また「しっかりやってきます」と元気な声で応えて行つた学生もいた。この日、高崎聯隊の営門を入つた四名の立教生は果たして無事に帰還したであろうか、この四名の立教生はいずれも私が教えた学生ではなく、もちろんその名前さえ知らず、いまではその顔かたちさえ思い出せないのに、この時のことを思い起す度びごとに私の眼頭は熱くなる。

二月四日午後、文学部教授会が開かれ、種々対策が協議されたが、私は民族学協会の仕事でこれに出席できなかった。同一六日、手塚隆義教授（昭和六年卒）と会い、理事会の強固な文学部廃止の方針を知り、研究室の

処理にかかることとした。ついで二四日午前一時から学監室で緊急文学部教授会があり、学監より文学部の授業停止に伴う処置および来る一月八日からの新時間表の説明が行なわれた。これによると、過日がされた方針通り、各学科長以下教授・講師はほとんど休職となり、一部少数の者が経済学部において新時間表により授業を行なうこととなる。そこで出席者一同これを承認せず物別れとなったが、結局、この当局の方針に従い、ほとんど大部分の教授・講師たちは辞職してしまった。しかし、私は辞表を出さなかった。立教大学が廃止されるまで、大学から解職されるまで、自分から辞職しないつもりでいた。そうしたら、二月二一日、教務課から経済学部の新制度の時間表を送つてきて、明年一月から私は経済学部で講義するようになっていた。こうして昭和一八年は暮れていった。

#### 昭和一九年の記録

昭和一九年の正月は、立教大学の前途と戦局の切迫とを思い、私は暗い気持でこれを迎えた。

立教大学では文学部だけでなく、経済学部も入隊応召する学生が多く、これに対処して学則変更を行ない、学科目とクラスを整理し、新時間表をつくつて、一月八日から授業を開始した。しかし、私はこの時間表による授

業には出講しなかった。そして、前年から彰考書院との間で出版の話が進んでいる小林秀雄先生の『ベルムハイム史学研究法』の原稿の編集をしていた。この原稿の浄書には史学科一年の岡田陽一・哲学科一年の成田公一の両君などを動員したが、枚数が多いのでなかなか思うようにははかどらなかった。

二月二日、突然、総長からの呼び出しがあつて大学へ行く。三辺総長・須之内学監に会つてみると、大学新聞が銃剣道部の予算につき批判したのを配属将校の飯島大佐が問題にして、その記事を執筆した学生を処分するよう求めてきた由である。私は新聞部の学生たちから事情を聞いて、飯島大佐に会つて釈明するためその自宅を訪ねたが、不在であつたので仕方がなく、留守番をしていたお嬢さんに事情を話して帰つたら、意外にあつさり諒承されたらしく、その後再び処分の申入れなく、この問題は解決した。三月に入るとようやく文部省から理科専門学校の設立が認可になり、予科長の曾弥武教授がその教頭に就任し、これに伴い辻莊一教授が予科長に、須之内学監に代つて立教中学校々長の帆足秀三郎氏が学監に、それぞれ就任して戦時体制をかためた。

ところで、この頃は用紙の不足から出版事情はいよいよ窮屈になって、立教大学史学会も日本出版会に加盟し

て用紙の割当を受けねばならなくなり、三月一六日、金三〇円也の入会金を払込んで加盟手続をとった。しかし一方では、小林先生の『史学研究法』について、彰考書院から辻善之助先生校訂の『異国日記』出版の話がありこれについて柴田・手塚両教授と相談の結果、三月一九日、三人で辻先生を訪ね、出版のご承諾をいただき、この原稿を柴田教授が準備することになった。このように『史学研究法』や『異国日記』などの出版の話がわれわれの間ですすめられたのは、「史苑」の刊行をつづけるためには、用紙の不足だけでなく、それ以上に資金が不足していたからで、これらの出版によって先生方から印税の何パーセントかを「史苑」刊行の資金にまわしていただくためであった。

四月に入ると恒例の入学試験が行なわれ、私は二日から六日まで試験の採点に動員され、つづいて柴田教授の学生部厚生課長就任に伴って、四月一〇日から毎週、月・火・水の三日、各三時間宛、予科三年三クラスの国史の授業を担当することになった。この授業には前年文部省が編纂・発行した『国史概説』を教科書として使用するよう要請されていた。この授業は五月二四日で終り、その月の二九・三〇日に第一学期の試験が行なわれ、試験が済むと学生たちは、増産のため近郊の農村や工場に

勤労動員されて行った。そして、六月二八日から第二期の授業がはじまったが、授業をしたのは一日だけで、勤労動員はつづけられた。

九月八日午前一〇時、私はまた総長から呼び出された。新聞部員がなにか事件を起したかと、総長に会ってみると、経済学部一年生のために「東亜民族誌」を開講するよう交渉を受けた。学生たちはいずれ入隊・応召して海外各地の戦場に行くであろうが、その場合に少しでも現地の住民に対する理解をもてるような教養を与えたいというのである。「東亜民族誌」の講義は九月二一日から毎週土曜日の朝の一・二時限に行なわれ、翌二〇年の一月からは金曜日に変わったが、二〇年七月一六日までつづけられ、その間多く学生が熱心に聴講してくれて、私としては実に張り合いがあった。また予科三年生の国史の授業も再開され、九月三〇日から三クラス合併で毎週一回土曜日の三・四時限に行なわれたが、この授業は一〇月二八日で打ち切りとなって、学生たちは十一月一日から板橋の陸軍第二造兵廠に勤労動員されることになり私もまた毎週一回の割合で、午後七時から翌朝七時におよぶ夜勤監督に行くことになった。

私は早速十一月二日からこの夜勤監督に行った。まず門前に夜勤交替の学生を整列させ、隊伍を組み、歩調と

#### 昭和二〇年から終戦までの記録

年末の三〇日、三十一日から一月一日とつづいて、私の住居に近い雷門・蔵前・柳橋などの地区がB29の焼夷弾攻撃を受けて焼けたので、私は昭和二〇年の正月を、文字通り空襲の不安のうちに迎えねばならなかった。

立教大学では早くから防護団が組織されていたが、こうした情勢に対処して、一月に入ると夜間の防空宿直が強化され、私も六日に一回、月に五回の割合で、防空宿直をすることになった。私は、早速、一月八日が当番で、防空宿直を行った。宿直員は教職員四名に学生一〇名ほどで、宿直員の組合せは多少の異動はあったが、現立教高等学校校長の泉康先生・一般教育教務課長の佐藤由蔵氏に、亡くなられた番匠谷英一教授などと、いつも一緒に組であった。宿直室にあてられたのは、経済学部研究室（三号館）の階下の中庭に面した、現在の図書室あたりの二部屋で、部屋中央に大きな四角な箱火鉢が置いてあった。私たちは暗幕で覆った電燈の下で、この箱火鉢を囲んで戦局の話など語り、以前、この建物が寄宿舎であった当時のものか、あるいは造兵廠病院から借用したものか、病院で使っているような鉄のベッドに横になって仮眠をとった。

この頃の大学構内は、本館（一号館）・文学部研究室

の行進をもって入門するのだが、元気がないと何回も行進のやりなおしを命ぜられる。また、作業は熔鉱炉に鉱石・残材をいれてとかし、真紅に熔けたものを埴塙に受け、それを二人で持って、土間に立て並べられた鋳型の一つづつ流し込んで地金を造る作業と、この地金をまた真紅に焼いて、ロールにかけて平板に造る圧延作業である。造兵廠の中でも一番はげしい鋳造工場と圧延工場、夜半一二時に一時間の夜食の休憩があるだけで、作業中は腰をおろすこともできない。もしも作業中に腰をおろしたり、おしやべりでもしていると、ところを巡察の将校に見付けられると、大変であった。なれない学生たちにはまことに重労働で、毎晩のように顔・手・足に火傷をうける者が続出した。その上、一二月になると、また毎晩のように敵機の空襲をうけるのであった。軍では立教大学の学生たちを鍛えなおすつもりで、特に選んで地金工場と圧延工場に動員したのであるが、学生たちはなに一つ不平ももたさずに、この試験に実によく耐え抜いたものだと思われている。一九年十一月に入るとB29の偵察侵入がはじまり、警戒警報が発令され、やがて一二月下旬には爆弾投下も行なわれ、一二月になると敵機の空襲もようやくはげしくなり、不安のうちに昭和一九年は暮れて行った。

(二号館)・経済学部研究室(二号館)・食堂にかこまれた芝生には、小山のように数か所に防空壕が造られたほか、各建物の外観などはいまも昔も少しも変わっていないが、その機能は予想もなかったほど変えられていた。文学部研究室は早く同学部の廃止とともに、私たちがまだ研究室の私物の図書や道具などを片付け終わらないうちに、陸軍造兵廠の兵隊がやって来て私たちの図書や道具を、現在、学生たちが部屋に使っている東側の木造建物にほおり込み、その代りに研究室にはベットの運び込まれて、陸軍造兵廠の病院施設とされてしまっていた。これにつづいて、当時の予科校舎(四号館)は築城本部に、また中学校々舎は東京北部防衛部隊に、チャペルは東京都の食糧倉庫に徴用され、五月の空襲の後には本館の階下に池袋地区の各銀行が軒をならべ、終戦後の二年三月の預金封鎖や新円切換の際には、私もこの銀行で手続をしたものであった。

二〇年一月から八月一五日までの私の日記には、毎週金曜日の「東亜民族誌」の講義と防空宿直と造兵廠の夜勤監督と空襲のことばかりが書かれている。一月二七・八日、二月一六日、同二四・五日、三月四日、同九・一〇日など、再三にわたるB29の大空襲で下谷・浅草など東京の下町区域はほとんど焼かれてしまったが、幸い私

の住居は被害を免がれていた。

東京の山手区域に大空襲があった四月一三日の夜は、私の防空宿直当番の日であったが、急に大磯に勤労働員で行っている学生に連絡の用件ができて、当時、学生部に勤務していた同級生の小松勝美君に宿直を代ってもらい、私は大磯へ行っていた。前年の十一月からほとんどの学生は板橋の陸軍造兵廠に昼夜二部交替で勤労働員されていたが、鑄造戸延の重労働に耐えられない弱体者が三〇名ほどいた。大学ではこれらの弱体者のために、大磯駅前山手の加藤家を借りて宿舍とし、平塚の軍需工場の下請をやっていた無線器の部品を作る町工場で軽作業をさせていた。この大磯に私の母が年とった女中と二人で疎開していた関係で、この方の監督・連絡を頼まれているので、私は毎週一回は大磯へ行っていた。それで私は池袋周辺が焼かれた四月一三日夜の空襲には遭わなかったが、気の毒をしたのは小松君で、私が代って宿直をしたために自宅を焼かれ、その後間もなく大学を辞めて、奥さんの実家のある北陸の町に疎開して行ってしまった。その後、池袋・新宿など東京の山手区域が再び大空襲を受けた五月二五日夜は、また私の防空宿直当番の時であった。空襲警報とともに学生たちを防空壕に待避させて、私は独り本館のアーチの下に立ってB29の来襲を待

っていた。間もなくB29が現われた。対空砲火の中を低空で乱舞するB29を見守っていたら、突然、食堂の左隅、弓道部の道場のある方角に焼夷弾の落下する音が聞こえた。私は学生数名を連れて飛んで行ったが、何事もなかったのでホッとした。しかし、本館のところまで引きかえして来たら、本館前の小学校など立教通り北側の地区が燃え出していた。この二五日夜の再度の空襲で、池袋地区は立教大学の建物を残して全く灰燼に帰してしまつたのである。池袋駅の屋根を焼かれたホームに立つと、一望焼野原の中に立教大学の赤レンガの建物だけが見えるのである。

これにつき『立教学院八十五年史』は「これは米空軍が米国よりの寄附行為によって建てられたものを自ら破壊するのを愚として特に焼夷弾の投下を避けたものであると伝えられて居る」と書いている。しかし、空襲の明けた翌朝、小使さんが「先生、図書館の二階の床にこんなものが落ちており、屋根に大穴があきました」といって持参したのは、焼夷弾三六箇を束ねた弾頭につく、直径三・四〇cm、厚さ五・六cmほどのコンクリートの円盤に鉄棒の芯を立てた部品であった。当夜、B29から大型焼夷弾が投下され、まさにその弾頭は大学図書館の中心に命中したが、三六箇に分解した小型焼夷弾は、当夜の

南風に吹き流されて、立教通り北側地区に落下し、図書館はじめ立教大学の建物は被害を免がれたのであろうと思っている。この大空襲で東京の各区はほとんど焼かれてしまつて、B29の空襲はその後地方都市に対して行なわれるようになった。

七月一六日、夕方、私は一週間ぶりに大磯に行った。駅を出るとすぐ裏手にある加藤家に寄って、学生たちに大学からの伝達事項を話し、学生たちからは作業報告を聞いて、私は母の家に帰って、遅い夕食をとって床に就いた。その夜、一時から翌日の二時まで、隣接の平塚市の軍需工場などにB29の波状攻撃がくりかえされた。その内に大磯駅附近にも焼夷弾が投下され、学生たちの宿舍になっていた加藤家にもそれが十数発命中した。加藤家の建物はかなり広がったので、各所に火の手が上がり、学生たちは手分けしてその消火に努めたが、山の上で水利が悪かったためか、ついに全焼してしまった。この消火活動のために学生たちはほとんど持物も運び出さず、着のみ着のままであったが、幸いに負傷者など一人も出さずにすんだ。

その夜は学生たち全員を母の家に泊め、翌日私はまず大学に電話で連絡するとともに、近所に実家のある者から順次に帰郷させることにした。学生たちは多く靴を焼



いてしまったので、藁草履を買い集めて、これを履かせて帰郷させたことを思い出す。

そして、八月一日、私は「学徒勤労動員部厚生副課長ヲ命ズ、手当月額三十円ヲ給ス」という辞令を大学からもらったが、その手当をいただかないうちに終戦を迎えることになった。

(昭10卒/本学教授)

伊東多三郎 戦時下の史学科学生たちを、史学科休止中の戦中日記 いたるまでみてきた当時史料編纂所に勤務し、立教で近世史を講じてきた伊東多三郎の刻明なドキュメントによって、荒廢のなかの学生たちの暗い姿をうかがってみよう。

## 戦中の日記

伊 東 多三郎

私が立教大学史学科の講師に招かれたのは、昭和一七年十月のことで、それから一九年正月史学科廃止で解唄となるまで一年五カ月の間、この学園で日本近世史・明治維新史などを講義した。学生数は少なかったが、三

年生には林英夫・田辺広・佐藤健・山本明などの諸君が聴講して、毎週火曜に一回教室に出るのが私には張合になるような気分であった。当時、戦況は日に日に不利の様相を濃くし、国民生活は窮迫の一途をたどり、大学は戦時国家の要請と学問の保持との板挟みとなって苦悩していたが、このような危機にこそ、緊張感と生命感とで、学問に志す者の心情が純粹になるのであった。その頃の日記に、立教のことが所々出ているので、つぎに摘録する。

昭和十七年十月二日(金) 立大より火曜午前十時より十二時までの時間割決定の通知。

同月三日(土) 立大の方決定につき、午後川崎君(庸之)と共に藤本了泰氏を芝の寺に訪れ、幹旋を謝す。白鳥清氏に(立大歴史科長)挨拶状を出す。

川崎君は私と共に講師に新任したのであり、藤本了泰氏は国史の主任であった。

同月六日(火) 立教大学の講義、今日より始まる。十時より十二時まで。清潔で物しづかなよい学校だ。但し学生が至って少ない。三年生を教えるのだが、十二名しかおらず、今日の出席者は三人だった。

この頃、ラングロア・セイニョオボール共著、歴史学入門の訳者(昭和十七年四月刊・人文閣) 高橋己寿衛君や切

支丹史研究の新進海老沢有道君に会うことを期待していたが、高橋君は軍隊に応召したという話であり、海老沢君は卒業していたので、大学で会う折はなかった。林英夫君は時々紺紺と袴の書生姿で教室に出て来た。そして郷里の尾張の起宿の史料や国学者の書状などを持参して見せてくれた。

十一月二十四日(火) 立教の講義。うまい講義をしたあとは気がよいが、そうでない時は何となく面白くない。

これは教壇に立つ者がだれでも感ずる気持だ。十二月八日(火) 大東亜戦一周年。この記念すべき日、生死の戦を強調する声しきり。

(中略) 立大の講義に戦史の講義をする。臨時に戦国時代の戦史の話をしたのであろう。同月二十九日原稿を書終る。百五十枚分位あろうか。庶民文化試論。

この庶民文化試論の序説に当る部分は、翌年「史苑」の編集者の依頼で、同誌に掲載した。私が立教の講師時代に「史苑」に出したものは、この論文のほかに海老沢君の切支丹史研究の書評がある。

昭和十八年四月二十四日(土) 靖国神社の臨時大祭で休み。(中略) 午後立大の学生が四名見える。

二年生の日高信也君等四人が来宅したのである。史学科の現状に不満があるとのことと、いろいろ議論した。先生一人一人へ自宅訪問して、ハツパをかけていたらしい。なかなか盛んな意気込であったので、当時の記憶がはつきりしている。いちばん多くしゃべったのは、日高君である。

五月十八日(火) 立教の講義。「史苑」に掲載する論文を渡す。庶民文化試論の前半の部分。大いに「史苑」を盛にして行きたいと思う。

六月八日(火) 立教の講義。今年卒業する者が八人いるのだが、国史が一人、西洋史が二人、東洋史が五人、一寸(ちよつと)妙な割合だ。

国史のただ一人の卒業生は林君である。論文は郷里起宿を主題としたもので、私が採点した。この三日前の五日には、山本連合艦隊司令長官の国葬があった。

同月十三日(日) 午後、立教の学生林英夫君が来る。家蔵の尾張起宿関係史料目録を見せる。今日は午後五時より訓練開始八時半に終る。(在郷軍人会の訓練)

同月十五日(火) 立大の講義、佐藤健君一人。第一乙の由。予備学生になるかどうかと考え中の由。

若者すべて自己の運命を国家の運命に結び付く。

七月七日(水) 鉄道ホテルで、立教の新学長の招

待会あり。九時帰宅。(雅弁で学長支持をまくし立てた教授がいた。学内で対立があったらしい)

同月二十九日(日)立教の林英夫君が来る。史料に入りたいということだったが、今度海軍の予備学生に志願し、第一次に通ったので、九月の半に行なわれる第二次の結果を待たねば判らぬから、しばらく見合せにした。いとの話。いや感心なことだ。佐藤健君も受けた由。

同月三十一日(火) 立教の単位論文が三通届く。

九月九日(木) 六時より立教で史学科学生の送別会あり。卒業生八名の中三人、教師六人、在学生五人もつと出席者が多いかと思っていた。米一合持参。山本元師の話をして激励する。

卒業生八人のうち、三人しか出ていないので、淋しい送別会であった。山本元師(五十六)は私の郷里の先輩である。

同月十日(金) 林英夫君よりハガキ。来る十三日、三重航空隊へ入る由。勇ましいことだ。

林君などは卒業生送別会にも出られぬままに、軍隊へ入る準備中であつた。

十月二日(土) 学生(一般の) 今日より徴兵検査。

十二月一日入営、丙種の者でも全部入営の定め。理科系統のみ入営は延期。之で大学は事実上授業停止となる。いつでも軍の措置が一足先きだ。文部省の勇断

をいよく熱心に計策せねばならぬ。その具体案に就いては、何事も聞いていない。ただ文化諸学を軽視するものではない。ということばかり繰り返してはいかん。

同月二十六日(火) 立教の講義。学生も少なければ先生も少ない。私立大学の整理統合、商業学校の工・農・女商への転換、具体案来月中には出来の予定のこと、そして三月までに必要な措置を講ずる由。

十一月二日(火) 立教の講義日だが、学生が出ぬので休講とする。

同月九日(火) 立教の講義。朴君たゞ一人。一体に先生の方も殆ど出講せぬ。今日は教官室は僕一人だった。こうした有様はよくない。出陣まで学業は続けるべきだ。

同月二十一日(日) 午後原稿執筆、夜も執筆「国学と洋学」五二枚出来上る。林英夫君よりハガキ来る。横須賀の海兵団の学生隊に在るのだ。立教より学部授業停止の件に就き、二四日に教員会を開く旨の案内あり。(当日、本郷で防空演習があつたので出席しなかったようだ二四日にその記事なし)

十二月一日(水) 学徒皆入隊す。学園寂寥たり。立教へ俸給取りに行つたら、学部の方は人かげもな

さ望む。大学院問題だって私学の方から苦情が出て、議会でも問題となつた所、もう方針を更へて、やつさもつした挙句、一昨日ようやく発表の段取。早慶二校にも研究生を置くことになったが、学徒の入営で之が何の役に立たず。(中略) 学生、その名に榮あれ、学問よ、榮えよ。

十月三日(日) 午前中で、「所謂兵農分離の実証的研究」を書き終わる。(中略) 九月十日に結婚、二十六日学校卒業、二十八日披露式、二十九日出立、十月一日呉へ入隊海軍予備学生〇〇さんの長男のこと。

十月五日(火) 立教の初講義。四名ほど出席。在籍者七名。十二月一日には皆入営するのだ。二カ月足らずの時をいかに有効に使うか。講義のやり方に苦心したが、結局明治維新に就いて講義することに決める。今日は開講の辞で、自分の心境や学徒の心掛、入営までの学問の仕方、講義の予定等を話する。

十月十三日(金) 明日一番(発の汽車)で帰郷の予定。今夜、立教史学科の出陣学徒の送別会が雅叙園であるのだが、出席出来ず。

同月二十二日(金) 学徒壮行会、神宮外苑にて挙。首相・陸海相・文相臨席。数万の見送る学徒、見送られる学徒。新聞に感激の記事。政府は文化諸学の振興

い。授業停止だ。

同月二十三日(木) 学校の新体制定まる。文科系一斉に縮少整備。ああ、かかる時代、我等学徒何を為すべきか。

昭和一九年正月元日(土) 立教より学部授業停止に就き、休職(無給)の通知来る。

同月二十一日(金) 立教から懇談したことがあるから来てくれというので、午後から出掛ける。大分多くの人が入れかわり立ち代り学長室を出入りしている。結局退職の件で、辞職願を書き、六十円の退職金と相親会の三〇円の退職金を貰ってかへる。

以上で私の日記から立教の記事はなくなる。二三年前のことであるが、これを摘録していると、当時の情景が心頭に浮かんで来る。(東大教授)

文学部 つぎに文学部の廃止という非痛な状況を、身を休止 以って体験してきた手塚隆義の回想によって、この事実を記録しておこう。

## かくて文学部は消える

手塚隆義

昭和一八年一月を以て、立教大学創立以来の古い歴史をもつ文学部（宗教学科・哲学科・英文学科・史学科）は、その活動を止めた。これを休止と呼ぶべきか、廃止というべきかは、いまだに明かでない。休止といえど二年五月の出発（戦前の宗教学科と哲学科とを併せたキリスト教学科と、英文学科を英米文学科とした二学科をもって出発、翌年四月に社会学科が加わった。史学科はこれに遅れて、二四年四月に開かれた。これは再開であり、廃止といえど新設である。）当時の責任者よりは、文学部の処理に対する抗議的質問に対し、「時局、万止むを得ぬ故、文学部を休止する」とも、「一学部 of 存廃などを問題にするなど、時局を弁へざるも甚しきもの」との言を受けとっているからである。

このような決定に至るまでの当局の経緯については、教員はまったく知らされていない。知りたくも、聞かされたのは前記の言でしかなかったのである。

学徒動員によって全国の大学生は、理工学部の学生を

生の処置が決定したこと、もはや断念せざるをえなくなった。文学部研究室（現在の2号館、現社会学部研究室）は、それぞれ後始末をした。史学科は史学会の蔵書を建物の屋根裏に運び、考古学関係の標本の類は図書館に寄託し、教員は学校を立ち去った。長い巻紙に文学部教員の氏名を連記して末尾に、「右の者退職を命ず」と記した辞令が、研究室建物の入口の壁にはられた。

かくて、文学部は一たび姿を消すにいたったのである

（本学教授）

## 3 「史苑双書」と史学科再生

昭和二〇年八月一五日、日本の敗北によって第二次世界大戦は終りを告げ、地上に平和がよみがえった。しかし、東京は廃墟と化し、瓦れきの山が街をおおっていた。多くの人々は飢に苦しみ、食を求めて町をさまよい歩いた。わが大学は、ほとんど戦災を受けなかった。緑の森と赤レンガの建物は、何ごともなかったようにそそりたち、ふたたびチャペルの鐘が鳴りはじめた。戦いに敗れて、軍服姿のまま大学に戻ってくる学生が窓口に姿をあらわし出した。しかし、あの日、出陣したまま、永遠に戻ってくることもない多数の若い魂もあった。

除いて一せいに学窓をはなれた。かかる学部の存しなかった立教大学（現在の理學部の母体となった理科専門学校は後に設けられた）は、ほとんどの学生が去って行った。しかし、きわめて少数ではあったが入隊の際の身体検査で不合格となるものが出た。このような文学部学生にとって、文学部は当局がすでに廃止を決定しているのであって、帰るべきところが失われてしまったのである。教員のうちには教員数を減じても文学部を存置し、これら学生を収容すべきだと主張する者もあったが、当局はすでに廃止の決心を固めていた。それならば、これらの学生を、大学の責任においていかに処理するかの問題が当然考えられなければならないかった。おそらく、このような問題は各大学に等しく起っていたと思われる。都内の大学には、かかる際にも、なお文学部を存続しているものが、いくつかはある。それに委託するか転学せしめて学業を続けさせるほかはない。たまたま当時の三辺学長は慶応義塾の出身者であったために、このあたりで話し合いがついたと思う。数名の文学部学生は慶応大学へ転じた。はじめは委託して卒業はあくまで立教大学とすることはできないか、との話もあったが、もとより実現はしなかった。

文学部の縮小存続を強硬に主張した数名の教員も、学

敗戦とともに史学科復活の運動が、同窓のなかから起ってきた。この運動の中心となったのは手塚隆義・海老沢有道・宮本馨太郎・日高真也（昭一九卒・現サンケイ新聞）らであった。手塚・海老沢の両氏から、その経過を回想してもらおう。

## 再生運動と「史苑双書」

手塚隆義

文学部の廃止とともに、史学科を主体とした立教大学史学会の存続も問題となった史学会は大正一四年に創設せられた史学科が、創設以来の科長小林秀雄教授を会長として結成された学会でその主なる事業は機関誌「史苑」の発行である。この頃は歴史学関係の雑誌といえば、東京帝国大学の史学会の「史学雑誌」、京都帝国大学の「史林」、国学院大学の「国学院雑誌」、三田史学会の「史学」などであって、現在のごとく多数の大学の史学会または研究室から史学関係の雑誌が出ていたわけではない。「史苑」が昭和三年一〇月に創刊号を出したのは、創設日浅い立教大学史学科としては、大変な冒険でもあった。第一巻第一号の目次をみると白鳥庫吉「神代国号考」、辻善之助「黒衣の宰相金地院崇伝、附 異国日記解

題」、市村瓚次郎「論語源流考・一」などがみえる。

創刊当時は月刊を目標にしたが、これはいかに考えてもむりであつて、しばらくして年四回にせざるをえなくなった。しかし連絡として出刊されており、津田左右吉「大化の改新の研究」のごとき雄篇も数回にわたって掲載されているし、もちろん本学関係の研究者・学者・卒業生の論文も載っている。いわば、「史苑」は史学会発刊というものの、立教大学史学科の学術活動は、疑ってこの雑誌にあり、卒業生にとっては魂の故郷である。多くの研究者より無量の援助と激励とを受けはしたが、

創刊以来の関係者の物心両面の苦心は、並大抵ではなかった。もとより、改めていうまでもなく、学術雑誌の刊行が等しくたどらねばならぬのは、苦難の途であり、敢て「史苑」のみが経験したことではないにしても。

しかし、太平洋戦争がしだいに激化するにつれて、史苑の発行もしだいに窮屈になった。まづ端的な現われは、紙の不足と工員の徴用による印刷所の能率の減退とである。紙は配給制になり申請して割り当てを受けねばならない。こうなれば出版は当局者にとって活殺自在である。国策——この言がいかに広く行われたことか——に反対はもとより、非協力的と思われれば紙の配当を不許可にすることによって、出版を不可能にすることは容

易である。某日、お茶の水あたりにあった出版報国会から召集されて、紙の配給停止が恐ろしさにまかり出たことがある。出席者は四〇人ばかりもあつたらうか多くは歴史関係の雑誌の代表者で、見知った顔も二・三みえる。開会されると会長が、出版者は積極的に戦争完遂に努めねばならぬ、学術的な出版物といえどもその枠外ではないことを訓示し、ここで声を大にして「これから各雑誌の代表者に、一人一人いかに銘々の雑誌が積極的に時局に協力しているかを、具体的に述べてもらう」との御託宣である。

「史苑」の編輯方針は反戦的ではないが、といって、とくに直接「聖戦」を支持したり国民の士気を鼓舞するような論文を載せているわけがないので「具体的に」などといわれても閉口せざるをえない。しかし見渡したところ、いずれも学術雑誌の代表者である。してみればいうことは大体同じ、きまりきつたものである。二、三人の説明があつたら、それと大同小異のことを述べるほかあるまい、と腹をきめていると、いきなり「先ずはじめに立教大学の「史苑」の代表者より説明してもらう」であつた。

紙質は粗悪になつたが、割り当ては細々つづき、刊行することはどうやらできたが、いよいよ昭和一九年後半

になると困難になった。大学の文学部の存廃が問題になつてきたからである。そして、いよいよ一九一九年九月の第一五巻四号をもって「史苑」の刊行は断念しなければならなくなった。この号には加藤繁「科挙の政治的意義」が載っている。昭和三年十月の創刊以来、年を閲する一六年、通巻七一号であつた。この号は印刷ができあがつたが、もはやとどけてくれない。止むなく少しづつ遅んだが、そのうちに神田にあつた印刷所は空襲で焼け「史苑」もほとんど灰燼に帰した。したがってこの号にかぎって、少数しか残っていないというエピソードである。

文学部は二一年に再開されたが、史学科のそれは数年間遅れた。その理由について当時の学長事務取扱須藤吉之祐教授は、大学の経済事情により全部の再開が困難であると説明され、再開の文学部長に就任した菅岡吉教授も、同様なことを説かれた。いずれにせよ、史学科の空白時代である。この間、学校をはなれた教員と卒業生、いわば立教大学史学会の会員の結束は解消してはしまわなかつた。否、かかるときこそ、かえって史学会の意義は、史学の研究以外に会員の結束という点で、大きな意義をもつことになったのである。「たとえ史学科はなくとも史学会は存する。存しなければならぬ」というのが共通の信念であつた。

このような考えから史学会の活動はつづけられた。史学科は消滅し「史苑」は休刊。したがって集合の場所すらない。上野桜木町の宮本氏宅に事務所を置いて「立教大学史学会々報」を発行して会員の連絡をはかった。また終戦後の数年は物資不足は言語に絶した。しかし知識に飢えた人々の知識に対する欲求はつよく、ある書店のごときは、朝開店を待つ行列ができたほどである。史学会、はそれまで「史苑」に載つた論文を集めて「史苑叢書」を刊行することを企てた。史学科の再開がおくれ、したがって「史苑」の復活も見当がつかぬ際に、せめて叢書の刊行という活動をと企てたのである。

かくて叢書の一として岡田太郎『民族学論攷』を太平洋出版社より刊行した。すでに同氏は世を去つていたが、会長的小林教授を輔けて史学会を創立し「史苑」を創刊した一人である。知友羽仁五郎の序文を乞ひ「民族学の概念」以下一二篇の論文集である。これにつづいて津田左右吉「歴史の矛盾性」を叢書の二として世に送った。表題の論文および「日本思想形成の過程」など四篇の論文を、同氏の了解を得て一冊にまとめたものであつた。両書とも物資不足を反映して紙質は粗悪、今日よりみれば体裁はすこぶる貧弱であるが、大いに意義のあつたことと思う。しかし戦時中に、かつて教鞭をとられた、中

## 史学科復活運動

海老沢 有道

村勝麻呂・藤本了泰・加藤繁の諸先生を、戦後間もなく市村賛次郎先生を葬った。また在学中に応召した学生にして、戦場に斃れた卒業諸氏もけつして少しとしない。

「史苑」が通巻百号を出すに際して、史学科および史学会の迎ってきた途を回顧すれば、感無量である。とくに約五か年の史学科空白時代は、反省の材料として後に多くの教訓を遺した点で、ひとしお忘れたいものがある。かかる間に史学科再開の機はいよいよ熟した。二十四年三月の「史学会々報」七号は、新制大学の発足に際して史学科が再開されることを報じ、同年一月の八号は、野々村科長の「史学科の進む途」を掲げて、その抱負を明かにした。史学科は二十四年四月に五年四か月ぶりで生命をふき返した。史学会もふたたび史学科を母体とした活動を再開したのである。思うに史学科創立に当って教授・学生・卒業生・一般会員をもって成立した史学会が、史学科の消滅に当って教授・学生の会員を失いながら、なお史学科の研究活動を継続し、会員との連絡を絶やさなかったことを記しておこう。(本学教授)

悪夢のような戦争は終わった。そして閉鎖されていた文学部も昭和二十一年四月、キリスト教学科・英米文学科の二科をもって復活した。が、哲学科と史学科の再開は見送りになった。手塚隆義・宮本馨太郎、それに復員してきた海老沢有道らは、卒業生を糾合し、大学当局に史学科復活を強力に働きかけようと、五月以来協議を重ねた。しかし何分、混乱期の当時のことであり、卒業生の消息もなかなかつかめなかった。が、復活の母胎とするため、まず立教大学史学会を再建するのが先決問題であるとし、六月、学内で史学会の名の下に海老沢の「近世日本」の成立と世界史への登場」という公開講演会を開催。三〇余名が集まり、予想外の成功を収め、七月七日、再建総会を開くことになった。

総会といっても集る者わずか一〇名であったが、日高真也(昭和十九年卒)が総会開催までの経過報告をなし、座長に海老沢をあげ、規約を決定、役員を選出、会長に手塚をあげ、「史苑」の復刊、図書出版、図書室・資料室

の開設などの事業を決定した。当日までに消息の判明した旧教職員・卒業生数は、ようやく二七名であった。

史苑復刊は当分経済的に不可能であるので、会員の連絡のため、謄写版刷りの「立教大学史学会々報」を発行することにし、一〇月第一号を出した。また『史苑叢書』と銘打って、「史苑」所載の論文に、新研究などを加え第一期一五巻を刊行することになった。もちろん史学科再開のために努力し、一二月七、九両日にわたり、会長・幹事らは佐々木総長、哲文学部長と面会、立教の特色を活かしたアメリカ史を中心の史学科を二三年には再開したいとの口約を得た。これに対し幹事らは、アメリカ史とは限らず戦前に劣らぬよう充実した史学科の完全復活を希望し、具体案を作成して、当局と再交渉することにし、一二月七日には大類伸博士を迎え「歴史観について」と題する講演会を開き、氣勢をあげた。

一方、「史苑叢書」一五巻の交渉は八月二〇日、『群書類従』の復刊をしていた太洋出版と契約をし、一〇月津田博士および故岡田太郎助教授の原稿を入れた。津田博士は当時花巻に疎開されていたが、手塚がわざわざ出張して出版のお許しを得たが、博士はすんで「史苑」発表の旧稿を入念に訂補され、『歴史の矛盾性』が出版されたのは、二二年四月のことであった。つづいて八月に

は岡田太郎の『民族学論攷』の上梓をみた。ともに斯学の先駆者であり、科学的学問の烽火をあげた貴重な論考であることはいうまでもなく、学界展望の企画としてひじょうな期待が寄せられ、また事実好評を得て版を重ねた。一大学史学会の力では容易に企て得るものではないこうした大企画を、史学科をもたぬ立教大学史学会が敢然として、実施したことは内外をして本会の存在を改めて見直させたものであった。つぎに海老沢の起草になる「史苑双書刊行趣意」を掲げておく。

創立以来、一切の学問にとらはれず且つまた強権にも屈することなく研究の自由を堅持し、研究機関誌「史苑」をあらゆる困難を排除しつつ刊行、史学発展のため一路邁進し来た本会は、岡田博士も太平洋戦争に際会し学内外を吹き捲った嵐のために「史苑」第十五巻の完結を以て遂に事業中止のやむなきに立至った。しかし史学研究への情熱は一刻もやむことなく、ひたすら再起の機を窺ひつつあった吾等は、史学再検討の要望せらるる秋を迎へ、新たな構想を以て元立教大学文学部史学科関係者を網羅して再建、その第一事業として「史苑」発表の論考を中心とし、それに新研究を加へ、太洋出版株式会社との援を得て「史苑叢書」を刊行、光栄ある自由の学府の学灯の下、茲に再出発を宣する運びとなった。

願はくは著者ならびに読者諸賢の支援によりこの企てが幾分なりとも学界に寄与するとともに史学普及に貢献せんことを

昭和二十一年十月 立教大学史学会史苑叢書編纂委員  
引続き辻善之助・小林秀雄、十河佑貞・藤本了泰・市  
村瓚次郎・野々村戒三・駒井和愛諸先生はじめ、手塚・  
海老沢・宮本らの著が予定され、市村・野々村・手塚・  
海老沢の原稿の成稿をみたが、不幸にして太平洋出版は突  
如倒産してしまい。第二期七巻の企画まで進めながら、  
中絶のやむなきにいたった。

(昭9卒本学教授)

史苑双書と 岡田太郎の『民族学論攷』(昭和二年八  
津田左右吉 月五日)と、つださうきちの『歴史の矛盾  
性』(昭和二年四月十日発行)が刊行されるにいたっ  
た。津田は、その労作を『東洋学報』と『史苑』におも  
に発表してきた。津田が本会に投稿してきたのは、本会  
との人間的なつながりのほかに、かれの在野的性格と本  
会の自由闊達な気風とが、よく合ったことによるもの  
ように思われる。『歴史の矛盾性』刊行のころ、津田は  
戦禍をさけて岩手県西磐井郡平泉村に移り住んでいた。  
戦後の嵐のようなデモクラシーの波のなかで、戦前・戦  
中を通して節をまげず、真実を追求してやまなかった津  
田の学問は、ジャーナリズムの広く注目するものとして  
新鮮な姿でふたたび登場するにいたった。かれが当時既発  
表の論文を再行したのは、この『歴史の矛盾性』一冊に

と思います。この書は今絶版になっていますが、遠  
からず改訂版を出すことになっていて、只今その準備  
中であります。ところが、これを除けると、あとのも  
のだけでは、百五十頁ほどの一冊にするには分量が不  
足ではありませんか。そう考えますと、僕のはご計画  
にはあてはまらないのではないかと思います。この  
点お考え下さい。

なおいろいろの書肆から僕の論文を書物の形にして出  
すことを依頼してまいりましたか。それらはすべてこ  
とわって来しました。というのは、何れそのうち何等か  
の形で全集のようなものを出すつもりでいますので  
あちこちの書肆からバラ／＼に一部分づきの論文集を  
出すことは致さないつもりだからであります。御計画  
のは史苑叢書という特別のものでありますから、上記  
のように考えますが、その代り、他日、全集出版の際  
には、その方へ叢書収載の論文をも編みこむことを、  
あらかじめご諒承を願いたいと存じます。

なお頁数にかかわらず、僕のを叢書の一に加えられる  
ことになりましたらば、論文補訂を施したものが手許  
にありますから、その補訂のところをお知らせして、  
それを原稿にして頂きたいと存じます。これもまたお  
含みおき下さい。

とどまっている。それについてのいきさつを、津田と親  
交をもっていた手塚隆義宛の津田書簡のなかから、刊行  
に關係する書簡七通を年次の順に記録して、明らかにし  
ておこう。

#### 津田書簡

(この書簡はすべて平泉村の津田左右吉から、鎌倉市篠目の「手  
塚隆義様」宛に出されたもので、原文どおりに採録した。昭和  
二十一年一月二十四日付の封書のみ「つだ さうきち」の署名で  
差し出し、他はすべて漢字名であることを付記しておこう。)

昭和二十一年七月一七日付封書

おてがみ昨日拝見致しました。その後ご健康で何より  
の事と存じます。僕もどうかかうか無事で、相変らず  
の生活をしていますから、ご安心下さい、思いがけな  
くこんなところへ来ましたが、わりあい気楽に朝夕  
を送ることができるので、当分ここにおちついてい  
るつもりです。

小林君、その他、立教大学史学科関係の諸君はご無事  
でしょうね、お会いの節、よろしくお伝え下さい。さ  
てお申越の件、もと／＼史苑にのせたのですから、そ  
ういう計画ならば、僕の方に異存はありません。ただ  
「神とミコト」は「上代日本の社会及び思想」のうち  
に収載してありますから、それは除いていただきたい

御返事まで取急ぎ 草々

七月一七日

手塚様 机下

津田 左右吉

昭和二十一年九月一日付ハガキ

拝啓

お元氣のことゝ存じます、先日二度めのお手紙を拝見  
しましたが、一応、岩波の方へ話をしておくことが必  
要と思ひまして、その手続をとっていたために、ご返  
事が遅くなりました。岩波でも諒解してくれました  
が、ただ先日もしました如く、他日岩波で論文集を出  
す場合に、それらの論文の採録をご承諾下さるよう、  
予めご承知を願って置いて欲しいとのことですから、  
その点は含みおき下さい。他の書店からの申入れには  
すべて謝絶していますから、そのこともお含みを願  
います。それから四篇とも筆を加えてありますが、かな  
り込みいった訂正をしたものもあって、その力所を写  
しとって差し上げるわけにはゆかないし、また手許の  
ものをそのまま差上げることにすると郵送の途中で万  
一紛失などがあると困りますから、そちらで原稿用に

お使いになるものを一応お送り願いたいと思います。それに訂正を加えてご返送することに致しましょう。なおいつごろまでに訂正すればよいかわかりませ下さい。九月一日、

昭和二十一年一〇月二三日付封書

拝啓

史苑の論文の訂正したものを、只今小包でご返送致します。「歴史の矛盾性」には、原稿に書き入れたのでは混雑してわかりかねるところや、書き入れるには補った部分が長すぎるところやがありましたから、そういう部分は別の原稿紙に書きかえてとじこんでおきました。「祭政」のにもそういうところが二カ所あります。補訂は何れも数年前に手控への史苑に書き入れておいたものをそのまま写しとったまでですが、今度読みなおしてみても筆を加えたところが稀にはあります。右まで 不

十月二三日

手塚様

机下

津田 左右吉

(右は原稿用紙を使用して書いているが、その余白に次のような書き足しがある)

十一月二四日

手塚様

津田 左右吉

拝啓

先日ご依頼しておきました書物の寄贈先き左記の如くお計らいをお願いします。まだ急がぬことゝは思いますが、思い出しましたから忘れぬうちに申し上げておきます。 不

十二月一日

手塚様

津田 生

記

東京都、板橋区、小竹町二六七六

栗田 直躬

東京都、武蔵野町、吉祥寺、三五五ノ二

鈴木拾五郎

名古屋市、千種区、田代町、城山、二二八

児玉 昌

東京都、世田谷区、世田谷、二ノ一四四五

和田 清

東京都、本郷区、駒込上富士前町、東洋文庫

岩井 大慧

同上、東洋文庫

補訂の部分には文字のわかりにくくなっているところがあるかと思えますから、念のために校正を一度お見せ下さるならば幸甚に存じます。なお序文は後日お送り致します。

岩手県西磐井郡平泉村 つださうきち

昭和二十一年一月二四日付封書

拝啓 先日は失礼しました、お約束の序文封入して差し出します。

僕はニホンの固有名詞をすべてカナ書きにすることにしていますから、扉の名まえも「つだ さうきち」としておいて下さい。但し表紙には「津田左右吉」とした方がよければ、それでよろしくごさいます。なおお名前、のよみ方がわかりかねましたので、序文そのところを空白にしておきました。然るべくお書き加えをお願いします。

書物ができましたら、岩波書店へ一部送って下さい。

なお、僕の名で寄贈したいところがあり、その発送方を発行書肆にお頼みしたいと思いますが、その寄贈さきは、追ってお知らせすることにします。 不

取

榎 一雄

東京都、日本橋区、箱崎町、四ノ三一、山中方

松島 栄一

東京都、淀橋区、下落合、二ノ七〇二

南原 繁

愛知県、豊川市、牛久保町、岡崎高等師範学校

吉岡 紹直

東京都、住原区、東戸越、二ノ一〇一四

岡本 三郎

以上

なお、白鳥清、十河佑貞の両君へは貴方から贈られるかと思つてここには省きました。また池内宏君と京都の原随園君とも贈りたいのですが、これは貴方から贈られなければ、上記の表中に二加えて下さい。

昭和二十二年三月二十一日付 ハガキ速達

拝復

三月二一日

検印のことはお任せ致しますからよろしくお計らい下さい。名まえのことも表紙に漢字を用いられることはかまいません。それで結構です。たゞ校正は厳密にお願い致します。

おかぜであつたよし、おなほりとのことで安心しましたが、あとにお氣をつけて下さい。ご健康を祈ります。僕は幸に無事で寒い時節を過ぎました。ここは今日も雪がふつていますが、しかし少しづつあたたかくなつてまいります。

取急ぎお返事のみ 不一

〔編者注「歴史の矛盾性」は昭和二年四月十日発行〕

昭和二年七月六日付 封書

拝復

食糧難の折柄、それでもお元氣のお様子で結構です。こちらから今日からは米の配給はできないだろうという話ですが、どうなりますか、

「歴史の矛盾性」追加印刷のことは差支ありませんが、誤植の主要なものだけ、訂正できるように話を願いたいと存じます。別紙を記しておきます。

白鳥清君におあいになることがありますか、ありましたらよろしくお伝へ下さい。今はどこにいられるのですか

お大事に 不一

七月六日

手塚様

つだ そうきち

## 史学科の再生

海老沢 有道

また史学科再開も昭和二三年度からということになっていたが、二二年三月菅文学部長と宮本幹事との会見によつて、折柄のいわゆる六三三制の学制改革にともなう新制大学への改組のため、一年延期する旨、当局の意向が伝えられた。しかも二二年度からは文学部に社会科学が新設されており、史学科卒業生として、従前からの史学科が後回しにされたことに対し遺憾の極みであつたが、二三年七月、新制立教大学設置申請が文部省に提出され、二四年二月正式認可が下り、定員百名（一学年二五名）の史学科が、いよいよ実現することとなった。教員組織はつぎのごとくである。

教授	史学科長	史学研究法	野々村戒二
同	同	西洋史学特講	藤原 守胤
同	同	西洋史概説	清水 博
同	同	西洋史学特講	細入藤太郎
同	同	西洋史概説	手塚 隆義
同	同	東洋史学特講	小林 通雄
同	同	東洋史学特講	小林 通雄

机下

二 伸

正誤は鉛版を修正することができれば、結構ですが、もしできなかったら、正誤表を作つてそれを書物のはじめにはりつけておいてもよろしいかと思ひます。はりつける場合には表紙の裏面か扉の前か、いづれにしてもはじめの方にしたいと思ひます。

昭和三年八月一二日付

お手紙拝見しました。立教の史学科再開に決定しました由、喜ばしく存じます。正しい方向をとつて出発せられんことを祈ります。

「歴史の矛盾性」ことは、僕としては差支がありませんから、しかるべく計らいを願ひます。正誤表のこともよろしく、

今としの暑さは少からずよりましたが、しかしとにかく無事に口を送っています。たゞいろいろのことを妨げられて、じぶんのしごとが少しも捗らないので困っています。白鳥君におあいの節よろしくお伝へ下さい。

八月一二日

不一

同

講師（兼任）

日本史概説

宮本馨太郎

助教授

日本史特講

海老沢有道

教授（兼任）

歴史地理学

中田 栄一

同（兼任）

自然地理学

石島 涉

経済地理学

飯塚 浩二

その他、歴史哲学・史学史・民族学・考古学・古文書学・人類学などを置き一二三学年を採用、一挙に開講する予定であつたが、つごうにより第一学年のみ一〇名を迎え、四月二五日から、閉鎖以来六年日にして、史学科の再開をみたのであつた。

ここに再建史学会は当初の大目標をたつし、会報も同年一月付で、野々村科長の談話と、史学科再開経過報告を載せた第八号をもつていちおう中止し、「史苑」の再刊を期すこととなった。以上の貴重な記録を残してくれた会報は、初号と八号とを除き、宮本がガリ版を切つたものであつた。

（本学教授）

アメリカ史 手塚・海老沢の二つの記述からもわかる  
中心の史学科 るとおり、アメリカ史を中心する史学科という形をとつて復活した。そして西洋史は藤原守胤



・清水博・細人藤太郎のアメリカ史のエキスパートのみをもって構成した。さて、この「アメリカ史中心」を生み出した背景を、うかがってみよう。二十一年一月初旬、立教大学史学会関係者は、総長佐々木順三からつぎのような回答を得ている。

「立教建学精神に則り、文科中心に漸次かえして行く。史学科の復活は前々から考えていたところではあるが、来年度は予算の関係上困難。しかし、この次はアメリカ史を中心とし彼の地の援助の下に史学科を復活したい。史学会の後援をまつ」（『会報』2号）

さらに菅岡古文学部長は

「立教の特色を活かした史学科、即ちアメリカ史中心の学科をつくりたい。すべては来春アメリカより Associate Dean の到来を待って計画したい。」

と述べている。二四年四月から再会した史学科の復活初代（小林・白鳥につづく三代目）科長と定まった野々村戒三はつぎのような談話を出している。

「立教大学がアメリカと関係深いことは、今改めていうまでもない。従って本学くらいアメリカ研究に便宜のある学材は他に発売出来ない。今回学制改革により全国に多数の大学ができたが、これらの大学が各特徴を持つことになる。立教はアメリカとの深い関係を生かして特徴をもつことは当然と考える。してみれば復活した史学科が西洋史、とくにアメリカ史研究に教等の便

宜ある点からして、この方面に力をそそぎ特色を生かすことは当然である。外人教授の来朝も実現するし、図書の充実も約束することが出来る。日本で西洋史、アメリカ史を学ぶなら立教史学科で、というような風にしたい、と考える」（『会報』8号）

という三人の言葉からも「アメリカ史」中心思想の生れ方は、ほぼ理解できよう。こうしてアメリカ史中心の史学科として復活したわけである。しかし同窓のすべてが、こういう形で生まれたことを喜んだのではない。たとえば、林英夫（昭和一八年卒）は日記のなかに、つぎのように記している。

二四年一月二日

「立教の『会報』到来、アメリカ史中心とのこと、それ自体はよいが、しかし、占領下、権力に妥協し、御つこう主義のあり方で復活は考えものなり。将来過恨を残すこともありうべし」

と記しているが、林のいう過恨なく今日を迎えたことは、何よりも喜ばしいことである。いずれにしろ、五年間の空白時代を終って、ふたたび、わが大学の史学科は、その光栄をあらわし始めたのである。